

## ひこぼし

頃は白昼。地上八〇〇メートルにある扉が閉まり、京都地表へ唯一の帰り道が塞がれた。振り返った宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーンが呆氣にとられる間も、施設入り口に置いてあるモニターは注意事項を長々と写している。

少女たちの前途へ広がるのはなだらかな起伏のある幾

つかの丘と、そこで昼の陽光と微風を欲しいままに浴びる草地。高空の猛烈な風雨に耐え、柔軟性に富む透明な天蓋にすっぽりと覆われた空間内は、申し分のない気温と湿度に保たれていた。丘の右手に見えるのは白い素朴な建物と、隣接している数世紀前の意匠で建てられた木造の平屋。牛舎と呼ばれるその古臭い小屋が、秘封俱樂部というオカルトサークルをやっている少女たちの目的地だった。

今日、二人は本物の生きた牛を見に来たのだった。

四方には京都を見下ろす全景が広がり、盆地を囲む山々の尾根ひとつひとつを見ることもできた。京都と東京間を地下新幹線が五十三分で繋ぐこの時代、科学力は光学迷彩で包まれた不可視の浮遊地の存在を可能としてい

た。空間の効率的な利用。観光事業が大きな収入源である都市であったため、景観に払われる細心の注意。都合と都合が混ぜ合わされた科学の結晶だった。

そこ訪れた彼女たちは十一歳の大学生であり、蓮子は超統一物理学を、メリー（蓮子は彼女をそう呼んだ）は相対性精神学を専攻している。浮遊実験地は彼女達の通う大学自慢の施設の一つではあったが、使用は都市計画科と食物造形科にほぼ限られていたため、二人が目の当たりにすることは無いはずだった。偶然知らされた施設の空白期間が行動的な蓮子の好奇心に火を点けなければ。未知の施設を覗き見るチャンスであり、前に計画した月面ツアーよりは遙かに現実的でもある。この侵入を提案されたメリーと言えば、困った顔をしながらも蓮子と同

じ瞳の輝きを放っていた。春とりどりの花さながらに。

こうして二人の子供は、勇氣と少しの嘘を使って目的地へ乗り込み、警告もなく閉じ込められた。透明金属の扉が沈黙を守り続ける中、彼女たちの心に状況への理解が緩やかに広がり、やがて我に返った。それから二人は真つ先に世界中へ張り巡らされた電子の情報網を立ち上げようと、端末の起動認証を行う。角膜に貼り付けられた人工樹脂のレンズへ映し出されるウインドウには、外部からのアクセスが全て遮断されている状態を示すサインがありありと浮かんでいた。躍起になって探し当てた情報網は施設内のみで使用するデータラインのみで、この経路も外部への出口は見つからない。

次に二人は物理的、電子的な鍵やスイッチを全て調べ、

手当たり次第に切り替えようと試み、全てが効果なしとみるや顔を見合わせた。

「困ったわね」

蓮子が馬鹿げた厚さの扉を肘で四度小突いた後、足を振り上げて蹴りつけんとしたためにメリーは制止して、忍耐が必要だと説かねばならなかった。

「蓮子。相談しましょう」

「いいわよ。私、どうしてこうなったのか解らないわ」

「私もよ」

「終わったわね」

すぐさま扉を蹴りつけようとする蓮子の身体をメリーが抱き止める。

「防犯警報が鳴る前に足を挫くわよ」

「それも込みで蹴るの。私たちのバイタルサインに異常があれば緊急要請が行くでしょ」

「外へ通信が繋がってない状態で、どこに要請が行くのよ。こういう時はレトロな方法を試すべき。おい！誰か助けてえ！」

耳元で素っ頓狂な大声を上げたメリーに目を白黒させて、今度は蓮子が友人の口を掌で塞ぐ。

「ちよつと、バカみたいな声出さないで。多分無理よ。無人の目を狙ってやって来たんだから」

「ちえつ」

ふと風に運ばれてきた肥堆こえづかの臭いにメリーは鼻をつまむ。

「それにしても酷い臭いねえ！ 天然の牛って、こんな

に臭いの？」

「ラフレシアじゃないんだから」

「なにそれ」

「昔どこかの観光地に生えてた、腐敗臭で人間を引き寄せる花だったかしら？ このきついのは多分、動物由来の肥料だと思う。美味しい肉を作るために、餌も随分と古い方法で育ててるんですって」

「ふうん」

眉をしかめたままメリーは辺りを見回し、牛舎の横にある白い建物を指さした。

「あそこに避難しましょう。えーと、設備利用者の家ですって。中まで臭いは来ないでしょうし、お茶もあるだろうからスッキリする」

瞳に映る仮想現実の表示を確認しながらの提案だったが、蓮子は渋い顔をする。

「勝手に使ったら怒られるわよ」

「ズルして入り込んだのよ。どっちにしろ、後でこっぴどく叱られるわ」

「このまま静かに黙ってても、お茶を飲み散らかしても一緒？」

「一緒ね。だから、あそこでのんびりしましょうよ」

「メリーって図太いよね。ああ、でも、ここでは珍しく三日間の休止が続いたはずだから、しばらく過ぎさなきやいけないかもしれない。食料と寝床の有無を調べるのは合理的かしら」

「三日間ね。早く帰れるように努力しましょう」



「こういう時のために、無線に頼らない、レトロな通信手段が装備されてるべきよ」

「紙飛行機とか？」

「光信号が現実的かしら」

「なるほどすごいわね。光学迷彩をオフにできればだけど」

素朴に過ぎる道を辿って二人は白い建物の中へ入り、リビングに飲食物を始めとする生活用品をたっぷりと見つけて安堵した。各設備もなかなか贅沢だ。

「ベッドがあつて良かったわ。藁を積んだ上にシーツをかけて寝るスタイルだったらどうしようかと」

「そこまでいくと、古いというより雰囲気になりたいだけじゃない。まあ、ちよつとだけやつてみたいけど」

ラウンドテーブルに並んで座り、勝手に淹れたコーヒ  
ーを飲みながらメリーが窓の外を眺めて言った。

「牛の姿が見えないわね。放牧してるって話なのに」

「寝てるんじゃない？」

「もう昼の三時よ」

「牛だからね」

「なるほど。私はもう少し建物の中を探検してくるわ。  
シャワーの性能とか。そして今日はさっさと寝ましょう。

牛の見物は明日よ、明日」

「じゃあその間、私はもう少しデータ相手に足掻いてみ  
る」

再び起動した仮想現実の向こう、蓮子にだけ見える四  
角い電子の玻璃に透けて、メリーは腰に手をやり胸を張

つた。

「家探しは任せて頂戴」

結局その後も秘封倶楽部は進展を発見できず、気晴らしに水銀の飛沫さながらの星空を一緒に眺めてから眠りに就いた。

部屋に入り込む太陽の光で目覚めた蓮子は、こつそり一人で牛を見に行くことにした。静かに合成砂糖がたっぷり入った紅茶を淹れて飲むと、前日に見つけておいた備え付けの作業服に着替えて厩舎へ向かった。この格好にはミスマツチになるいつもの黒い帽子を被って来たのは、ひとつくらい身に馴染んだものを身に着けたかった

のと、愛着あるそれにも天然の牛を見せてやりたかったからだ。

「きつと、とても大きくて臭いのよ。それに、モーと鳴いて、尻尾でおしりをペシリとやるんだわ」

独りごちて行く蓮子が踏む草に夜露は降りていない。あえて道から外れて草の中を歩く蓮子のブーツが濡れていないのもそのせいであり、温度が管理された浮遊牧場において、この夜の落し物が見られる事は稀だった。空気そのものが綺羅めいているかのように錯覚させるほど輝いている朝を、蓮子は夜色の髪を揺らし、草を踏み鳴らしながら歩く。

たどり着いた牛舎の中を入り口からそっと覗いた蓮子は、どうも様子がおかしいことに首をひねった。繊維で

編まれたマットの上で（藁でないことに蓮子は驚いた）三匹の牛が膝を折って休んでいたのだが、どの牛も妙にせわしなく耳や目を動かしたと思えば、緩慢な動きで首をもたれさせたりしているのだ。

ストレスレスの観点から、牛にはバイタルサインを送信する機能を取り付けられていないとの説明が、牧場のデータベースへ入っていた今期実験要項にはあった。そのため、飼育員は目視で牛の体調管理を行わねばならず、その指標とノウハウもまとめあつたのだ。

データをすでに流し見ていた蓮子は、牛の様子に違和感を覚えることができた。彼女はゆっくりとした歩調で中へ入り込み、獣の黒い瞳が自らへ注目することに緊張しながらも、辺りをじっくりと観察する。

異常は直ちに見つかった。舎内の地図の中には『飲用水場』という文字があつたはずだが、見た限りでは何処にもそんな物が無かつた。牛が首を伸ばすにはちようどいい高さにある、空っぽな箱型のオブジェはあつたが、『餌箱』はどうであらう。同じく草の入つた箱など皆無。

たちどころに状況を見抜いた蓮子は踵を返し、早足で出口を抜けると小走りになり、小走りはすぐさま駆け足に変わった。飼育員用の建物へ、昨晚、自分達がたつぷりと食事をした家の中へ大声を上げながら、黒い髪がたなびく程の速さで蓮子は飛び込んでいった。

「メリー！　メリー！　メリー！」

大騒ぎして寝ていた相棒を揺すって起こし、すぐさま二人分の簡易食料と飲み物、もう一着の作業着を用意し

て、蓮子は寝ぼけたメリーの顔を濡らしたタオルで甲斐甲斐しく拭つた。

「とりあえず食べて。飲んで。他にも用は済ませて。服はそこ。お願い、できるだけ速くして頂戴。私は調べる事があるから、全部終わつたら声をかけてね」

ジト目のメリーはそれでも要求されたことを素早くこなすと、無言のまま玄関まで歩いて行つた。片足を靴に通してからようやく蓮子に声をかけ、これが原因で二人は言い合いながら同時に扉を潜り抜ける。それから、秘封倶楽部は太陽が昇る中を、牛のために水と食草を集め回り、食べさせ、牛舎の掃除を行つた。

「何か手違いがあつたんだわ」

作業が一段落した蓮子は牛舎の外で壁によりかかり、

日当りの中で考え込んでいた。天高く昇った太陽が地上へ惜しみなく麦房むぎふさのごとき光を与える最中であり、彼女よりも多くの餌と水を運んだメリーは、転がった猫車に寄りかかり肩で息をしている。

「インド人だって、いまどき牛の排泄物をスコップで処理なんてしない。これはもう、古いというより原始的よ。なんで牛の世話をする部分が機械化されてないの」

「そんな事はプロジェクトの設計者に聞いてよ」

「もうノスタルジックな実験牧場も、牛もたくさん。たっぷり見たからお開きにしましょう」

「その二つ、これからもっと眺めることになるわよ。まさかとは思うけど、貴方、これつきり餌の世話をしらないなんて言うつもりじゃないでしょうね」



「もー」

「さつきから『もう、もう』ばっかりね、メリー」

笑いながらもせわしなく動く蓮子の指が、手荷物から持ち出してきたメモ帳をめくる。彼女はアナログな記録媒体も使うタイプの人間であり、浮遊牧場に関しての走り書きに何か手がかりがあるかもしれないと淡い期待を抱いたのだ。ある意味において、この行動は功を奏する事となった。とある頁をめくると、地面へ軽やかに落ちる物があったのだ。

それは鳥の羽根であった。羽毛すら骨でできた鳥がいるとすればだが。

宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーン、二人だけのオカルトサークル『秘封倶楽部』の主な活動は、禁じられて

いる結界暴きだ。常識の向こう側を、多くの不可思議を見てきた彼女達がいま目にしている物は、一番最近の活動で見た覚えのある物だった。ヘンテコな神社にまつわる、なぜか陰陽道で組まれたと目された結界を抜けた先で待っていた冒険。

その顛末はさておき、二人にとって忘れがたい奇妙な羽根、インク染みのない羽根ペンが、草と共に陽を浴びていた。

「なんで魔女のペンがあるの」

半ば理解した口調で蓮子が聞く。

「なんでかしらね」

半ば理解できていない口調でメリーが応える。

「この前会った奴よね。たしか、あらゆる本を、転じて

あらゆる文字をどうこうできるって豪語してた」

「数式もどうこう自慢してたわね」

「コーヒーを頭からかぶって、別れ際に『呪ってやる』とか言ってた気もしてきた」

二人はしばしば目を合わせながら、羽根を見つめていた。

「原因はこいつね」

「持って帰りましょう」

メリーが羽根を拾い、帽子の中へ納めた。

「ちよつと、何してるの」

「作業着のポケットの中へ忘れたら大変じゃない。一応、呪物なんだろうし。ここなら大丈夫。地上へ降りたら、お祓いしてくれるところを探して行きましょう」

「西洋産の呪いに強い神社なんてあったかなあ」

「西洋なの？ ああ、魔女だったわね」

「無かったら、結界の向こう側にある場所でもいいんじゃない？」

瞬間、二人は不敵な笑みを浮かべた。自信と傲慢の區別が付いていない笑みではあったが、お互いの瞳へ情熱がきらめくのを少女らは見たかもしれぬ。手慣れた、乗り越えられるかもしれない道筋の発見は秘封倶楽部を高揚させた。

「データが混乱させられるという形ですすでに呪いは降り懸かったんだし、これ以上の厄介事は無いと思うんだけど」 思いついたようにメリーが聞く。

「牛が呪われたりしないわよね」

「言葉や数式を使う牛がいたら危ないかもしれないけど、そんなサイバー牛はいないでしょ。それより次よ、次」  
メリーは辟易とした表情を浮かべた。

「次は蓮子が動いてよ。私は少ない目に動くから」

「大丈夫よ。牛を柵から出して、草を食べさせるだけだもの」

「あら、それはだめよ。まず先に私たちが食べないと、まいつちやうわよ」

二人はしばしの休憩の後、牛舎へ戻り柵を外して、牛たちをリードで外へと導いた。学生が短期間で実験や実習を行う事も多いためか、設備利用に関しては洗練されたマニュアルが用意しており、部外者である秘封倶楽部の二人でもなんとか操ることができたのだ。設備に関し

ては、だが。

「ちよつと！　なんでおとなしくしないのよ！」

三番にナンバリングされた牛のリードを、メリーが全力を使って引つ張るが、牛は嫌がつてびくともせぬ。

「こんなの一人で動かせるわけないわ」

「資料だと、誘導は一人でも行えますって書いてあるけど」

「蓮子は嘘つきね」

身体がくの字になるまで引つ張っても、三番は動こうとしない。太いリードはメリーの全力にも十分に耐えたが、やがて先にまいった彼女の腕が力を抜いてしまい、尻餅をつく形で盛大に転んだ。

「嘘つき！」

座り込んだメリーは大声で怒鳴り、怒りの冷めやらぬまま牛を睨みつけると、三番は視線を逸らして柵の奥へと歩いていった。

「あら？」

メリーの怒りが霧散する。牛の動きは、嫌がるというより怖がつているように見えたからだ。

「ねえ、蓮子。牛にも性格つてあるのかしら」

「そりゃあ、あるでしょう」

どうしたものかと腕組みをした蓮子を見上げながら、座ったままのメリーはしばらく考えた。

「外で他の牛を見て。私、あの子を連れて行くから」

「いいけど、怒った牛に撥ねられたりしないですよ」

「そんな事しないわ。多分。そういう性格よ」

メリーは立ち上がるとゆっくり牛へ近づき、見つめてくる動物の少し前で猫のごとく密やかに座ったものだから、蓮子は心配になってその場へ釘付けとなった。牛の瞳と少女の瞳が合い、動物の方から視線を逸らすと胴を落ち着かぬ様子で揺すり、やがて静かな顔をして頭を垂れる。蓮子が一步踏み出すよりも先に、三番は首から伸びたリードを自ずからメリーの側へ引きずり、彼女はそれを握るや立ち上がった。今度は引つ張る素振りさえ見せず牛を外へと牽いて行き、こうして全ての牛が光り溢れる緑の原へと連れ出され、たらふく草を食む様子を蓮子とメリーは見守っている。

「三番、人間が嫌いなのかしら」

蓮子が屈んでむしった草を空へ放ると、メリーは首を



振った。

「臆病なのよ」

翌朝、蓮子はまた一人で紅茶を飲んでいた。メリーはいま牛舎だ。正確には、牛舎と扉ひとつで隔てられた仮眠室に居る。どうやら牛が、特に三番が気になってしょうがないらしい。

「牛に結界でも見えてるのかしら」

思いついた事をそのまま呟いて、合成小麦から作られたパンを噛みちぎる。

（私も、牛の黒い部分に星や月が浮かんでいないか探そうかな）

他愛もない妄想を脳裏に描いていると、電話の着信表示が視界の隅に現れた。見たことのない番号に蓮子は一

瞬警戒を覚え、すぐさま興奮した。外部からの連絡なのだ。

「助かった！」

そそくさと通話を開始しようとして、数秒だけ自分に落ち着く時間を与える。言うべき事を整理しながら、少女は今日という日を笑った。

先方は事情を聞くや（ほんの少しだけ、蓮子とメリーにとって都合よく湾曲されていたが）、直ちに彼女たちを開放すべく手続きをとってくれた。その後の事は詳しく記すまでもない事だろう。魔女の呪いが消え去ったなどと、決めつけたのは誰であったか？

見たこともない、文字化けとしか思えない言語で組まれたプログラムが施設の管制システムに混ぜられており、

除去にもう一日かかると判断が下ったのはそれから暫くしての事だった。空中牧場の破壊に繋がるような危険物ではないと目星はついたものの、今話している食物造形科絡みの企業の一電話からしか外部のアクセスが許可されていけないのは、これが悪さをしているからだと言明された蓮子の耳に、魔女の悪意ある声が蘇るようだった。

「コーヒーを浴びるのは苦手だったのね」

蓮子は送話器から口を離し、呟いた。もう一日牛飼いの真似ができるならそれも面白いだろうと少女が考えていると、電話口の向こうが不意に口を噤んだ。話も終わり、さよならの言葉を口にしてもいいタイミングでの沈黙に対し、蓮子は無意識に手の甲を唇に押し当てた。寂しさや不安を感じた時に、彼女がやる仕草だ。

企業の担当者が頼んできた用件、そもそもの電話をかけてきた用件を聞いた時、蓮子は咄嗟に窓の外を見た。完璧に調整された環境。太陽が柔らかい朝日を投げかけ、草はたなびく緑柱石と化している。美しい、人造の風景が少女の瞳に映っている。

牛の屠殺をしてほしい、と相手は願った。

合成品の味を変更、改良するためには想像以上の手間が掛かること。そのための設備や都合は現代においてあまりにも限られており、一度決定してしまったスケジュールの変更は、そのまま長い予約待ちの列に並び直すことになるということ。

「数ヶ月でしよう？」と聞いた蓮子には、牛肉の味が時期を逸するには十分な時間だと返された。しばらく前

から浮遊牧場との連絡にささいな行き違いが多々発生するようになっており、予定されていた期日までになんとか手配を終わらせたのが今日なのだ、とも相手は言った（魔女の笑い声が聞こえなかっただろうか？）。

蓮子はさよならを言つて電話を切り、建物の外へと歩き出した。どの牛が処理されるのかは決められていた。恐らくは施設の前任者たちが、あらかじめ嚙矢を放つていたものとみえる。新しい肉の味は多くの人の楽しみになる事だろう。それを味わえなくなるのは、牛が生まれてきた理由を変えることだと蓮子は考えた。

真つ直ぐ牛舎へ向かうと、入り口に何故かメリーが立っていた。彼女の勘が冴えているのはいつもの事。蓮子に驚きはなかったが、踏み出す一步ごとに気が重くなる

のは避けようがない。

「おはよう」

「おはよう」

どこからか吹いた風が、もしくは何かが、二人の瞳を揺らした。

「三番はね」

「うん」

「立ち上がるとき、身体が右へ傾ぐの。横たわるにしても、右から寝る。足が悪いわけじゃなくて、癖」

「うん」

「私が一日でわかったのはこれだけよ。一番と二番の事をどう感じているだとか、鳴くのは多いのか少ないのか、人間のどんな仕草に怯えるのか、どの草が好きなのか」

メリーの指が絡まり合う。

「私、わからないまま」

蓮子は肯くだけだ。どうする、とも聞かなかつた。

「殺すの？」

「うん」

メリーは少しだけ不思議そうな顔をして、指と指を離した。

「夢みたいな事言うのね」

「じゃあ、現実にしちやいましょう。いつもの秘封倶楽部のように」

蓮子は腕を伸ばし、メリーの掌を握った。常に夢幻を遊んできた秘封倶楽部は、楽しみがいつかは終わるといふ事を、喜びの苦さを知っている。

「ええ」

二人は宿舎に戻って屠殺のマニユアルを確認し、工程を頭に入れてから全ての餌箱に草を詰め込むと、三番の柵を開いた。

蓮子とメリーに牽かれた牛が一頭、牧草地に付けられた道を横切っていく。途中で草を食べようともせず、真っ直ぐに歩いた。

「なんで抵抗しないのよ」

メリーが一度だけ発した呟きを除いて声は無い。

屠殺施設は浮遊牧場の出口付近、エレベーターから地下へ入った所にある。空調は外と同じく完璧だったが、通路においてすでに何かが失われているのが二人には感じられた。靴と蹄の音が鳴り止み、到着した処置室の台



の上には三番を乗せると、二人は隣の操作室に入って機器の点検を始める。不安になったのか、一時的に三番が大きく足を踏み鳴らしたが、巨大なガラス越しにメリーが見つめると再びおとなしくなった。

（信頼があるのは間違いないわ）

ガイドシステムが指示する通りに仮想現実のコンソールを動かしながら、蓮子は考えている。

（でも、それはどの種類の信頼？ 友人だけじゃなく、死神に対しても信頼は生まれるもの）

中空へ指を走らせるメリーを横目で盗み見ながら、蓮子は結論を用意しないようにして指を動かす。

こうして最後のスイッチを押すだけになると、蓮子とメリーは黙って顔を見合わせた。相手の顔を見て、それ

から蓮子が決定的なボタンへ指を伸ばそうとした矢先、メリーの唇が言葉を呟いた。水晶のように固く、透き通った声音が突き刺さったかのように蓮子の動きが固まる。彼女が紡いだのは誰かの名前だった。

蓮子がメリーの顔を見つめたのと同時、彼女の綺麗な横顔と金の髪を見ながら、大きなものが床へ叩きつけられる振動が足の裏へ伝わってきた。

メリーの白い指がスイッチから離れ、蓮子は小さな小さな息を吐く。すでにガラスの向こう側へ、脳をイオンで撃ち抜かれ転倒したはずの牛の身体は無かった。ただ、ぽっかりと開いた台の床があるだけであり、それもまた、ゆっくりと閉まっていく。仮想現実の状態ウインドウが映す『解体』という二文字を振り払うように最小化させ

ると、蓮子はさっさと出口へ向かい、ドアを開きっぱなしにしてからメリーを待った。じつと床を見つめて。

空中牧場から京都の地面へ戻ってきて二ヶ月後、蓮子とメリーは外食をすべく夜の街を並んで歩いていった。予約をしていたレストランの奥へ通されると、帽子を脱ぎながらメリーが言った。

「本当にここの予約が取れたのね」

「さっきも聞いたわよ。疑いは晴れたかしら」

「どんな手を使ったのよ」

ただの大学生が、予約でいっぱいのある有名店、いち早く

最新の味が楽しめる店で晚餐をとれるとは考えてもいなかった。

「頼み込んだのよ。『友人がどうしても故郷の肉料理を食べたいって言うんです。日本の牛肉も美味しいんだけど、赤身で柔らかかな甘みのある肉を食べたいわ、って。何とかありませんか』ってね。そうしたら、キャンセル待ちで良ければって事になって、現在に至るわけ」

「あらあら、外人の友人がいて良かったわね。で、その友人って誰のこと」

「知らない」

穏やかに話していると薔薇水で満たされた鉢が手すすぎに出され、次々と料理が出てきた。コースではなかったために数々の皿が一度に並べられたが、彼女たちが揃

って最初に口に運んだのは主菜のステーキだった。

一口食べ終わるまでは蓮子の方が遅く、メリーは目を閉じて待った。

「美味しいわね」

「ええ。美味しい」

蓮子が言うと、メリーは嬉しそうにナイフを動かした。牛肉の合成食に新しい味が追加されるのは、大体二ヶ月周期なのだという。いま楽しんでる味が、あの浮遊牧場にいた三番の肉から生まれた保証はないが、二人は食べずにいられなかった。

『赤身の肉は日本だとあまり受けないし、ケースの更新と取捨選択も、そこまで頻繁じゃないはずよ』

少し前に立てた蓮子の仮定に、メリーは言った。

『じゃあ食べに行きましょう。赤身の牛肉』

約束は果たされた。口へ運んでいる合成蛋白質も、何かの生き物が元となっていているのだと二人は想像できるようになった。知識として知ってはいたが。

蛋白質と味。昔と違い、現代人はふたつの異なる故郷を持つ料理を食べている。それは彼女達が生きる時代が生んだ贅沢なのかもしれない。

「ありがとう、蓮子」

「うん」

料理をあらかじめ片付けたメリーの言葉に、蓮子は考えるふりをして水の入ったグラスを傾ける。今夜、メリーは祈るように食事をしていた。失われた生命への敬意を、蓮子が手に入れられなかった心の在り方を、相棒はさり

げなく見せつけたのだ。小さな胸から出ようとする言葉を呑み込むべく、押し流すべく、蓮子はもう一度水を飲む。

『メリーだけ、ずるいわ』

言えるはずもなかった。秘封倶楽部のマエリベリー・ハーンとは、常に世界を共有しようとしてきた蓮子ではあるが、メリーの全てが欲しいわけではないのだ。こうした場合、蓮子はどうするのかを知っている。

「見習わないとね」

「ちよつと、口に出てるわよ。テーブルマナーの事？」

「正解。相変わらず勘だけはいいいんだから」

困ったわね、と蓮子は笑った。





N  
O  
W      A  
N  
D      T  
H  
E  
N

幻想郷に降りた夜の中でも、月光によって黒翡翠の海と化した竹林のそれは殊のほか美しく、この内側にある永遠亭にて星さながらの瞳を伏せて夢想に溺れている輝夜も同様に綺羅やかに見えた。だが、彼女の腕へ骨が軋むほどの重みが加わったために夢は破られ、咄嗟に掌へ持っていた銀色の玉を縁側から庭先へ放り投げると、重

い音と地響きを伴って土が高々と吹き上がる。

輝夜は鋭い溜息を口先で吐き出すと張り詰めた片腕を撫でた。使用者の思考を読んで質量を増大させていく物だとは彼女も承知していたが、使用に関係しない感情をも読んで機能するとは聞いておらず、突然心を覗かれたようで不快だったのだ。なにしろ見え良い物思いではなかつたゆえ。もしくは、そのために無意識に彼女自身が目覚めを求めたのかもしれない。

投げ捨てた玉は、本来レミリア・スカレットが不特定多数へ向けた無茶な要求、『時を止める道具が欲しい』という我儘への贈り物として永遠亭で作成された。死神に連れて行かれたあの人間の背中を未だに垣間見ているレミリアを、輝夜は輝夜なりに心配しているのだ。昔日

の月から隠れて生きる日々に終止符を打つ原因となった、幾たりかの内の一人であつたから。

彼女と吸血鬼は先ほどまで、ここで一緒に月見をしていた。浮かぬ席であつた事を認めながら、輝夜は用意された月見団子をひとつ口に含む。少し向こうへ置かれた台座には斑模様の紅白団子が月に濡れていた。客人として訪れていたレミア用に設えた物で、赤い部分は固まらぬように処理された生き血だ。半分ほど齧られた玉がひとつ、後は全て手が付けられていない。吸血鬼はすでに永遠亭の門を出ており、今頃は住処で過ごしているだろう。または夜空を巡り、悪魔のやり方で憤懣を晴らしているのかも知れぬ。

今宵、贈り物は輝夜の手の内にやんわりと突き返され、

その作成の労いにひとつの願いを叶えると約束された。結局、この時間停止機はレミリアにとってさしたる慰めにはならず、ただ贈り主への礼儀を引き出す事にしか役立たなかつたのだ。輝夜は応えられなかつた。これほどの屈辱があるうや？ 先達せんたうての物思いも、与えられた無意識の侮蔑に自らがどう振る舞うべきかをまとめるために費やされたものであり、結局どれほど考え直しても、輝夜は同じ答えにたどり着いた。報復こそが欲するものであり、新しい玩具を、相手が驚く趣向を添えて用いる必要がある、と。

半ば目を閉じた輝夜の意識に引つかかっているのは食べられかけた団子。やり返すのであれば同じく口に入れるもの、それも菓子での仕返しが望ましい。口の肥えた、

そのくせ偏食家のレミアアの口へ次々と運ばれる甘味を是非とも用意せねばならぬ。

やがて夜の途中でひとつの答えを練り上げた輝夜は立ち上がり、庭へ降りて埋まった半球を取り上げた。

「では、まだお前に働いてもらおうとしましょう」

輝夜はイナバたちを呼んで片づけを命じると、縁側には戻らず一人で庭を横切り、永琳の姿を探した。膳立ての命令と、いくつかの知恵を借りなければならぬだろう。彼女は本棚であり、輝夜自身は検索の仕方を知悉しておけばよかった。

月華が頬を照らすのを意識しながら、永遠亭の主は吸血鬼のメイドが紅魔館にどう従っていたのだろうかと考えた。少なくとも本棚ではなかっただろう。その在り方

が分からない以上、レミリアの空白を埋める方法を真の意味で思いつくことはできないが、そこから目を逸らす事は可能だと輝夜は自惚れてもいた。自らへ注目させる事に馴れきった娘であったゆえ。そうして、少し前までの耳目を集めまいと腐心していた数百年を思い出し、自らの滑稽さに輝夜は口を隠して忍び笑った。

その日秘封倶楽部が入ったのは、一風変わったサービスを行っている評判のカフェだった。京都上空八〇〇メートルで集積した太陽光を、光ファイバーによって可能な限り減衰させず店内まで引き込み照明として使用し

ているのだ。二千年以上前の皇都に降り注いでいた陽と科学的に一致するというのが謳い文句であり、そう言われてみれば店内に満ちる光は現在の物と違ってどこか鄙びているようでもあり、外とはまた違った時間の流れを過ごしているようだとメリーは思った。思いこもうとした。彼女は今、少しばかり感傷を必要としており、光量の調整というシニカルな言葉や、光学迷彩のコーティングによって不可視となつていゝるであろう、無骨で太い光ファイバーの柱が店へ突き立っている姿の想像を脳から追い出している。

その原因である蓮子の帽子、彼女の顔にぴたりと嵌まつて微動だにしない帽子を真っ向から眺めさせられ、メリーはためいきを吐いた。

「それは頭に被るものよ」

柔らかい光の中で蓮子は肩をすくめた。軽妙なその仕事草が奇装を際立たせている。

「取れない」

「よくここまで歩いて来れたわね」

「それがね、向こう側はちゃんと見えるのよ。皆にジロジロ見られるし恥ずかしいと思ったらないんだけど、真つ赤になった顔は隠れてるから幾らかマシね」

「原因に心当たりは？」

「無い。今回はお手上げかも。朝起きたらこうなつてたし、寝てる隙に妖怪でもやって来たんじゃないかなつて考えてる」

「妖怪帽子かぶせ、か。そんな都市伝説は聞いてないよ。」



ああ、もしかして犠牲者第一号じゃないかしら」

「それは貴重な体験ね。となると、うわさ話を流して統計を取れば正体が見えてくるとか？」

くぐもった声でしばらく喋り散らすと、蓮子は飲みもできないのに注文したコーヒーマグのカップへ指を絡ませ、止まった。メリーが再びためいきをつく。

「知らなかったの？　帽子越しにコーヒーマグは飲めないのよ」

「知らなかった。認める。息苦しくなってきたから、ちよつと黙るね」

「ご自由に」

呆れた声音の返事とは裏腹に、メリーは関連するオカルトや神話の探索、帽子への物理的なアプローチの方法

の指標を立てはじめ、それがいくらか形になつてきた頃だつただろうか。ふと脳へ冷たい予感が語りかけて来たために、メリーは周りの様子を見て、呼吸を止めた。あらゆる動きが停止していた。人間、機械、雲、陽光。向こうに見える席ではカップへ入りかけた砂糖が宙で止まっているのが見え、そこかしこで髪や服や手足が流れる途中で凍りついている。

メリーは首を振って自らの髪が物理法則に従っている事を確かめた後、蓮子の手首を握りしめて反応を確認し、彼女も普通に動いている事に安堵した。同時にカフェテリアの扉が音を立てて開け放たれ、二人の腰が派手に浮き上がる。

店の中へ入ってきたのが彼女でなければ、別種の驚き

で驚きが塗りつぶされなければ、秘封倶楽部は混乱のあまり闖入者へ手近な物を投げつけていたかもしれない。

美とはいかにも貧しい言葉だ。地面へ付きそうなほど伸ばされた黒い髪は流星のようであったし、その額は三日月の微光のようであり、瞳は比類ない静謐と星辰が燦っている。全てがたつぷりと作られた衣服は見事な生地で作られているのが一目瞭然で、袖に刺繍された雲水を縁取るのは素材の分からぬ鈍色の金糸。艶やかな光沢の長袴は歩きたびに床へ惜しげもなく引き摺られた。ただ一点奇妙であったのは、彼女の後から一定の距離を保つて、掌大ほどの銀色の球体が浮かんでいた事だ。

静止した空間の中を歩いてきた少女はメリーの横で立ち止まり、表情と言葉へ僅かな笑みの匂いを乗せて言っ

た。

「はじめまして、貴方。お話がしたくて参りました。席を戴けないかしら」

メリーは立ち上がり、隣の席と椅子を入れ替えて少女を座らせると、自分は蓮子の隣へ腰を下ろして言った。

「はじめまして。私は」

来訪者が手の平を上げて制止する。

「名は言わぬよう。お互いのためになる事だから。私は、そうね、かぐやと呼んで。かぐや姫ですから」

「そちらだけ名乗れるのは不公平じゃないでしょうか」

「いいのよ。もっとふさわしい名前があるけれど、貴方に言わせないから私もかぐやでいい。ね、公平でしょう。

あとは、口調も気安く、そちらの方と話すときの調子で

お願いしようかしら。何しろこれは夢のようなものなのだから、礼儀にはしばらく見て見ぬふりをしてもらいましょう」

返事として蓮子が指で丸を作ったので、メリーはその手を叩いた。かぐやが笑う。

「見ての通り、今は私達以外の時間を止めてるの。正確には私達の時間が狂っているから、周りが全部止まってる見える。詳しい理論はわからないから説明できないけど、そこは許してね」

「私はいいわよ。隣の子は齒噛みしてるだろうけど」  
かぐやは蓮子を見た。

「しばらく我慢してね。手頃な面隠しがそれしか見当たらないから。私が帰ったら取れるようになってるから安心

して。視界も、たぶん私だけ見えないように処理されると思うけど、害はないわ。

ああ、先に説明させて頂戴。私が貴方に会うためには、こうやって時間を止めないといけなかった。そちらの名前を隠し、貴方にしか顔を見せられないのも私のせい。かいつまんで経緯の説明もしたいのだけど、少し待ちましようか」

「お気遣いなく。一方的な受け身になるのは慣れてるもの。ところでコーヒーは好きかしら？ よかったら召し上がって」

メリーはごく自然に蓮子のカップを動かさず、かぐやに勧めた。礼儀が立ち去ったのであれば、この振る舞いも問題はなからうと値踏みして。かぐやは鷹揚に頷き、続

ける。

「いろんな妖怪や化物が住んでいる土地が——なんと、かぐや姫も住んでるのよ——何処かにあるの。そこのある吸血鬼が『時間を停止する道具が欲しい』と言いだしたのが事の始まり。いくつかの問題としがらみを越えて、作られたのがこれ」

かぐやが空に浮く銀色の球体を指差す。

「時間停止機。超質量を持つ物質を操作して空間を歪め、時間の流れを瞬間で止めるのが原理らしいわ。範囲内の個体が触れたり、触れるであろう物も自律的に判断して時の流れを均すのだそうよ。操作方法は考えるだけ」

「そんな科学は地球上だとまだ発生してないんだけど。未来旅行か宇宙旅行でもできる妖怪が取ってきたのかし

ら」

「あら。蓋を開けてみれば結構アナログなのよ。超質量物質は子泣き爺の一部で作られてるし、機能制御はサトリを式で擬似再現してる。なんとかなるものよね。」

で、吸血鬼の願いは満たされて、叶えられた。彼女はいたく満足して機械を開発者へ突き返し、同時に一つ願いを叶えてやると言ったの。その役得が私の手の中にやってきたものだから、ちよつとした制限付きでこちら側へ遊びに来たというわけ。思えば、人のために作った時間停止機が私のために役立つてるのね。あらあら」

「あらあら。すると私達は、かぐや姫が二度目の地球旅行にやって来た際に旅先で捕まえられた第一地球人なのかしら」



「違うわ。私の目的は貴方よ。せつかくだから、そつちの妙な御簾を被った方も同席させてるけど」

暢気に手を振って返事とした蓮子の腕を払い、メリーは言った。

「初対面よね、貴方」

「ええ。でも、話題になつた人間へ会いに来るのはおかしな事じゃない。わざわざ外へ出てまで会いたい人間はそんなにいないわ。ね、金髪きんぱの君」

なんとという笑顔であつたらう。メリーは赤面しながら、睨みつけるような顔で聞く。

「なんで私を知っている口ぶりなのかも説明してくれると助かるわね。私たち、月には行ったけど貴方も吸血鬼も見なかつたんだし」

かぐやの顔へ静かな驚きが広がり、それが笑いに変わる前に彼女は着物の裾で顔を隠した。

「貴方、想像以上に面白いわねえ」

「私達よ」

「うん？」

「私達。このヘンテコな彼女と私を合わせた二人で行ったの。二人じゃないと行けないの」

「あら、ごめんなさい。月の話は私も興味深い。後で、できればそちらの貴方の口からも聞かせていただけると嬉しいわ」

蓮子は両手の親指と人差し指で丸を作り、メリーがその手を叩いた。輝夜は口元を裾で隠したまま、再び忍び笑いを漏らす。

「私は今、地上にいるの。地上の少し外れた場所、ただの人間では迷い込みでもしないと来ることのできない場所なんだけど。黄金きんの貴方。こちらへ足を踏み入れた覚えは無いかしら？ 妖怪の棲む竹林や、妖精で溢れた赤い館などを訪れた記憶があれば話がしやすいのだけれど」  
「ある。夢として訪れたわ」

「では、数百年も前から貴方の記録が残っている事に関してはご存知かしら？」

「いいえ。冗談であつてほしい情報ね」

「夢は時空を超えるのね。そう深刻な顔をしないで、貴方。時間は確かに侵しがたい存在でもあるけど、同時に容易い物でもあるのよ。神格化される程度にはね。」

私はとても長生きだから、ふとした折に噂へ上る外来

人の一人が同じ特徴を備えている事に気づいたの。なにしろ現れる場所が普通とは違って、人間ならとても辿り着けない所にすら現れるんだから。そこで本棚を調べてみれば、昔の記録にも貴方らしい人物が出てきている。興味を持ったわ。情報を整理したり、残り香を逆探知したりして貴方がこの時代に生きていることを知り、機会ができた今日会いに来たというわけ。だから随分と気安いのよ」

「ただ喋りに来たの」

「大方は。異界に引き込んで警戒させるような舞台を用意せざるを得なかったのはお気の毒様だけど、私は貴方がどんな人間なのかを知りたかっただけ。神仏に誓ってもいい」

「満足はした？」

「それなりにね」

メリーが蓮子の方を見ると、顔の見えない相方はかぐやの方を向いて腕組みをしている。メリーは軽く頷いて言った。

「で、本題は？　かぐや姫が問題を出さなくてどうするの」

「賢しい子達ねえ。気に入っちゃうじゃない」

輝夜が両掌を重ねると、時間停止機が机の上まで動き、停止した。

「これをしばらく貸してあげるから、引き換えにちよつとお使いを頼まれてほしいの。思うだけで動くし、止められるわ。貴方、いいえ、貴方達二人だけで使う事が絶

対条件。あとは、あまりにあくどい事をしようとしたら怖い妖怪に取り上げられちゃうから気をつけてね。

私が欲しい物は単純明快。外の世界のお菓子、中でも洋菓子がいい」

「ここで食べていけるわよ」

「嫌よ、落ち着かない。私の家まで持って来て」

「でしようね」

「二人分、お客様と私の分をお願い。こちら側との入口と出口は用意するし、ちよつとした財宝も付けてあげるから骨折り損にはならないはずよ」

「お金はいらないわ。それよりも、貴方の客について教えてもらえる？ わざわざ異界のお菓子を食べさせてあげるために長々と回り道をするなんて、そうするための

動機の方がよほど魅力的なもの」

「お菓子はついでよ。目的は貴方」

「私はついで。お菓子が目的」

かぐやは口元を裾で隠した。

「勘が良すぎる子は嫌われるのよ」

「そうね。でも、運ぶ物の価値を知ると知らないのでは、身の入り方が違うのは解ってもらえるかしら」

かぐやは物言わぬ蓮子の方をちらりと見やり、手を膝の前で組み直した。

「お客様は先ほどの話に出てきた吸血鬼。私がこんな場所まで遊びに出かける気持ちを持てるようになった切欠のひとつは、その吸血鬼のせいなの。自らの過去を『今の毎日が楽しい』と一言で切り捨ててしまった子供よ。」

私が自分と引き比べるには充分だった。

それで、彼女には時間を操る人間の従僕が居たけど、人間の常で少し前に彼岸の向こう側へ渡ってしまった。時間を止めたり進めたり、空間をいじったりして吸血鬼の生活を支える事のできる重宝な人間だった。だからかしら、吸血鬼はその従僕をたまに思い出し、思い出しては無茶を言いだす。私はできるだけ、その無茶に応えて借りを返しておきたいの」

かぐやの顔に、瞬きの間だけ微かな愁眉が刷かれた。

「喋り過ぎた。もう嫌なんて言わせないわよ」

「言わない。しつかりと大役を果たさせてもらいますわ。ところで、そっちにも彼岸なんてあるの」

「あるどころか、三途の川まで飛んでいけるわ。どこで



あれ、生死は無くならないのね」

「地獄もあるんだ」

「冥界も、廃棄された元地獄も。選り取りみどりね。確か、貴方も目撃されてたように思うけど。何処だったか、何処でもだったか」

「幾つかは覚えがある。さ、それじゃあ、おみやげを渡す日時を教えて頂戴」

かぐやは秘封倶楽部へ訪れるべき日時と場所を伝え、そのこの結界の向こう側にいる者へ菓子を渡してくれるよう伝えると、一礼して立ち上がり、来た時と同じように優美な足取りで退出していった。

メリーはその後姿を視線で見送る事もせず、腕組みをしてじいっと銀色の球体を見つめたままであり、やがて

時間停止が解除されたのか、辺りの喧騒が蘇った。蓮子の帽子も独りで顔から滑り落ちる。少女はやにわに立ち上がり、メリーに一言もかけること無くカフエテラスの入り口から外へ全力で飛び出していった。

残された方の少女は中身が入ったままになっているコ―ヒーカップを眺めてから時間停止機を掴みとり、床へ落ちた蓮子の帽子を拾い上げ、会計を済ませてカフエの外で息を切らせて帰ってきた相棒と正面から向かい合った。

「メリー……」

返事の代わりに差し出された帽子を被り、蓮子は声を出さずに笑う。

「顔が見られなかったし、私達の月の話を聞く前に帰っ

たわね。言つてやりたいことが一つあったの」

「帽子越しにでも言えばよかつたのに」

「かぐやに言つても半分だけだしねえ。メリーも同じこと考えてるんでしょ？」

「当然。コーヒーも全く口につけなかつたし。ところで、私は彼岸花が嫌いって話を前にしたっけ」

「どうだつたかしら」

永遠亭の縁側で月見と洒落こんでいた輝夜とレミリアの目の前に、一切の先触れもなく、突然ケーキと紅茶が並んだ。レミリアの顔に広がる狼狽は輝夜がかつて見た

ことがないもので、直後に背後へ立っていた秘封倶楽部に対して向けられた視線の凄まじさは筆舌に尽くし難かった。

「かぐやに頼まれたの。そうすごい顔で睨まないでもらえるかしら」

声こそ震えていたが蓮子の動じない言葉に間を抜かれたのか、レミアは睨んだままではあるが形相を和らげた。それから輝夜へだけ見えるように唇を微かに開けて犬歯を見せつける。輝夜は呆れた顔で、後ろに例の時間停止機を浮かべる人間たちに言った。

「外界の菓子を持って来てとは頼んだけど、手ずから持ち込むなんて。それも、こんなやり方で」

「言外に匂わせるのが古い京都のやり方だって聞いてた

「んだけど」

「貴方達はそれを失って久しいじゃない。的外れもいところよ。それに、これ」

輝夜は用意された菓子を見て落胆していた。崩れかけたケーキは一番シンプルな、細工の何も無いストロベリーショートで、茶も香りが薄い。器も粗末で頑丈な、長く持ち運ぶための物であるのを見て取った。

「なにこれ」

「ご存じないの？」

「言外の香りがわからないようね」

「そんなことより、作ったケーキと紅茶を味わっていただけなのかしら」

メリーは輝夜と蓮子の間へ割りこむようにして、レミ

リアに言った。

「私、赤い館に行ったことがあるの。貴方は覚えてるかしら？ ええ、お久しぶり。あの時にいただいた物のお返しを持って来たの。せつかくの機会ですもの、ぜひ召し上がって」

吸血鬼が仏頂面で一口、二口と菓子を含み、血の味がしない割には美味しいと呟いたものだから、輝夜は我が耳を疑った。出されているのはどう見ても素人が作った代物だったからだ。それに、今しがた金の少女は作ったと言わなかっただろうか。次いで輝夜が一口菓子を食べると、はたして予想通りの稚拙な味がした。レミリアは洋菓子ならば何でも美味しいと言う味覚の持ち主ではない。輝夜は混乱し、咀嚼も忘れて口にケーキを含んだままだ。

「宇宙には重力がないから、色々と地上では作れないものができたりするんだけど」

蓮子が言う。

「静止した時の中でお菓子が作られるのであれば、それもきつと同じように普段の時の流れだと出せない味わいになるんじゃないかって思ったの。昨日まで何度もケーキ作りの練習をして、その度に試食した私達に違いはわからなかったけど」

「それ、物足りないでしよう」

メリーが吸血鬼の心を見透かす物言いをする。

「貴方が満たされたいのは当然よ。惚ぶということ、諦めるといふことをしないのだから。睨んでも駄目よ。怖いけど言わせてもらおう。」

なんで直接亡くなった方へ会いに行かないの。おかし  
いじゃない。こっちにも彼岸はちゃんとあるんだから、  
会いたくなつたのならあの世まで出向けばいい。冥界で  
も、地獄でもいい。貴方は人間じゃない。三途の川を渡  
れないのは生きている人間だけど、吸血鬼もそうだなん  
て聞いたことないわ。流れ水が渡れないっていう問題は  
浮上するけど、それくらい大したことじゃないはずよ。  
きつと人間が月へ降りる程度の問題。そもそも人間でさ  
え、頻繁に地獄へ行つては帰つて来てる」

吸血鬼の少女は唸り声を上げて苛立たしげな顔を人間  
たちに見せるだけだったが、次第に瞳へ別の色が、目的  
と希望が燃え始めてきた。彼女の眼が映すのはただの一  
人。この場にはいない、去つたと思ひ込んでいた者の顔。



吸血鬼の不快気な表情が、今までを取り繕うために被る仮面に過ぎなくなった頃、蓮子が言った。

「行ってらっしゃいよ」

吸血鬼は鼻を鳴らすや立ち上がった。そして庭へ土足で降り、輝夜へ向けて別れの挨拶と門から帰らぬ非礼を詫びると、土を屋根ほどまで跳ね上げながら勢い良く飛び去っていった。夜空の雲が真っ直ぐに裂かれていくのを見て、輝夜は秘封倶楽部へ聞いた。

「なんであんな無茶を思いついたのよ」

「なんでって」

蓮子とメリーは顔を見合わせた。

「私達ですら冥界には行ったし、地獄も見た。妖怪だつたらもつと楽に行き来できるでしょうに、どうして動か

ないのか不思議なのはこっちの方よ」

彼女たちの一方的な見解に、輝夜は天を仰ぐ。

「なんて好奇心かしら。満ち足りる事がないのも考えもの。とはいえ、私も今しがたの吹き飛んでいくようなやり方が好みではあるし、彼女も晴れて答えを持てた」  
輝夜は立ち上がると二人の肩へ手を回し、包んだ。

「お二人には感謝します」

そうして上等な衣でも下げるように軽々と両脇に蓮子とメリーを抱え、輝夜は廊下を渡り始めた。軽々と少女二人を抱きかかえる輝夜の歩調が静かすぎたのもあり、蓮子とメリーはしばらく呆気にとられて揺さぶられていたが、事態を飲み込んで最初は控えめに、そのうち全力で足掻き始めた。しかし輝夜の細腕はびくともせず、悠

々と廊下を進んでいく。

「遠慮せず、ぜひ誉れを受け取って頂戴。功労者の二人には、ぜひともあの主従の対面に立ち会ってもらわなければ」

「立ち会う……あの世まで行くの？」

「冗談でしょ、私達は人間なのよ！」

「人間も彼岸へしよっちゅう行くんでしよう？ そう言われてみれば、私がいなくなった後の都でも、小野の誰それだかが軽々しく地獄へ行っていたと聞いた覚えがあるわね。お二人は経験者なのだし、その観点からもぜひお話を伺いたいわ。あの吸血鬼は行動が手早いから私達も急いで準備しないと。さあ、一緒にうちの知恵袋へ相談しましょう」

雲が吹き散らされたためか、月は昼のごとく明るく三人を照らしている。

「まだ三途の川は渡りたくないったら！」

「三途。ああ、そうねえ。あそこは私が一緒だと無限みたいな川幅になるわね。どうしたものか」

輝夜は首を傾げていたが、何やら思いついたのか、いつの間にかやら支配権を取り戻した時間停止機——空間のポテンシャルを歪める道具を目の前に浮遊させた。空間を歪めてしまえば、距離の無限など如何程のものでもない。永遠も須弥も手中にしている輝夜には、それがよく分かっていた。

「結局、この玩具はどこで役立つ運命だったのかしら？」  
輝夜は笑った。この時になっても蓮子とメリーが脇で

騒がしいままであったから、久しぶりに心の底から大声で笑ったのだった。



## 夜空へ指が記すもの

京都の南、高度八〇〇メートルに天体望遠鏡を設置し終えたマエリベリー・ハーンは浮遊座敷の上で一息をついた。望遠鏡の先には星々があり、彼女が見るべきはそのどれでもない、地球まで光が届かない星のひとつ。その星へ四十年前、宇佐見蓮子は置き去りにされたのだ。

最新式の半重力装置が使用されている四畳半の座敷に壁はなく、それでいて内部は防風も空調も完全に効いて

いるのは、座敷の床を取り囲む円環の内部にある、驚異的な質量圧縮処理を施された物質が空間ポテンシャルを歪めているからだ。

マエリベリーは持ち込んだ携帯式の椅子と机に品よく座り、若い頃から変わらない冥い街を見下ろしながら、砂糖がたっぷり入ったお手製のコーヒーをすすする。机上には煎れたときの温度を $\sim$ 時間は保つ瓶の他にカップがふたつ。

彼女の目的は言うまでもなく天体観測であり、それに適した高所ならば京都にいくらでもあるのだが、豪遊とも言える金額を支払って浮遊座敷を借り、わざわざ山の無い市街南方で夜を見上げている。そのくせ口にしてるのは、少女時代に飲んでいた粗悪な合成品の再現。こ



れもわざわざ用意した物であり、現在ではマエリベリーの口に全く合わない代物となっていた。

だが彼女は、この消え去ったレプリカを不味いとは思えない。金色の髪に白が混ざるなどと想像もしなかった時代の、思い出による感覚の改竄だと自嘲しながら、マエリベリーは郷愁を啜っている。

郷愁の名は秘封倶楽部といい、生まれ故郷でもない京都で大学生よりずっと暮らしているにも関わらず、マエリベリーは在りし日に取りつかれていた。見よ、今も主観の横暴に関して思索を巡らせ、宇佐見蓮子に夢の話を聞いてもらった時の記憶を脳の奥より引きずり出してきたのではないか？

「あの時は言い返せなかったけど、やっぱり主観も真実

なのよ」

孤独な女性はつぶやいた後、己に苦笑した。

夢の世界を現実に変えるのよ、と蓮子に決めつけられた時を思い出しながらの物言いが、我ながら可笑しくなるほど少女めいていたからだ。半ば忘れかけていた口調、脱ぎ捨てた仮面をメリーは再び見出した。

「誰も私をメリーなんて呼ばないのよ。あんなに見当違いで、ふざけた名前を付けるのは貴方だけ」

陶器の杯を回してコーヒーの水面を波立たせながら、彼女は自分に独り言を許していた。呼びかける相手は失われて久しかったために、口へ出すことの無かった言葉をしやべり、心に区切りをつける事を許した。なぜならば、二人は今夜再会するだろうとメリーは信じていたか

らだ。観測を初めて∞日目の、根拠のない勘ではある。だが、宇佐見蓮子が信じていたメリーの勘を、今回ばかりは自身で信じてみる気になっていた。独り言は続く。

「人類は随分と軽々しく大空を見下ろせるようになった。

軌道上を飛び交うシャトルの本数を教えたら貴方はきつと驚くわね。ラグランジュポイント——トリフネ、覚えている？——に何人が寝起きているかも知らせてあげたい。そこへ大掛かりな観測装置が建造されたから星空の見上げ方も巧くなつて、今じゃ深宇宙をずいぶんと覗き見してるの。暗黒物質の抽出に成功してダークハローの構造解析が始まったし、クエーサー観測圏の外縁、一五〇億光年を境界とする光の崖から一步踏み出した観測が始まるって話もある。格別に貴方が好きそうなのは、銀

河系を貫く全長四八五〇光年のレーザー光束の存在かしら」

メリーは片方の掌で筒を作り、夜空を覗く。

「貴方はこちらを見下ろすばかりね。可哀想に」

一口含んだまずいコーヒーはずいぶんと冷えており、なけなしの香りも消えている。

「当時の貴方は私の目を通して、私は直に不思議を見たわね。メリーは窓。メリーは望遠鏡。メリーは万華鏡。四十年前、貴方が消えるまではそうだった。でも、秘封倶楽部のメリーは今やただの女。人を寄せ付けない年かさの教授。そのマエリベリー・ハーンが」

カップをテーブルに置くとメリーは口を噤み、続きの言葉を己の中で探した。今から自分は何を為そうとして

いるのか、それが分からなかったからだ。長年待ち続けた瞬間には違いない。だがその行動が単純すぎる故にメリーは惑った。夜空を見上げるだけでよかったのだ。他に何かがあるだろうか？ 何もなかった。

すべき事は思い出さなくらいあつたし、ここまでする年月も決して余裕のある物ではなかった。ただ星空を観測すればいいだけだったのに最善を目指してしまったメリーを、年月は静かに、たゆまず削ったからだ。座敷の隅に置かれた手荷物に混ざっている小箱はその際たる物であつたので、彼女はちらりと視線をやり、手に入れるためにかかった十年を思つて目を閉じた。今回の件に縁ある神の一部であり、おそらく願掛けにしかならぬであろうという事も彼女は知つている。

目を閉じようとも止まることのない思索が、メリーに秘封倶楽部の最終活動を思い出させる。今まで幾千も思いついた光景であり、時の流れに擦り切れて細部は見えずなくなったにも関わらず、今なおメリーを動かすには十分な幻燈だった。

『この光景を見せたかったの』

うれしそうに笑い、メリーの手を握り、笑う蓮子の顔。あの星の光景は確かに凄まじく、未だに人類があれを模倣できないかもしれないだろうとメリーは考えている。仮に太陽系から離れられるほどになったとして、それより先、何十年もかかるだろう。

たぶんメリーよりも興奮している蓮子の横顔の記憶を眺め、四十年後の彼女は笑った。

「よく言うわ。私と一緒に、初めて見たくせに」  
すでに彼女の視界は現実から遊離していた。当時を見  
つめ、眺めすかすメリーの瞳は夢に烟っている。

ここに隙間が生まれた。自らが現の向こう側を覗ける  
事を忘れ、蓮子を呼び寄せるために縁の品を携えてきた  
事を失念していた。もしくはは侮っていたのか。いつだっ  
て覗き見てきた向こう側は、領域を離れば何もしてこ  
ないのだと。

「姉さん、チンケな場所に出てきたわ」

不意に聞こえた声にメリーが顔を上げると、二人の少  
女が浮遊座敷の中に居た。音も、気配も、センサーも、  
来訪者を告げるあらゆる兆候が排除された侵入だった。  
赤と青、違うデザインの、オールドファッションのメイ

ド服を着た少女たちが物珍しそうに辺りを眺めている。  
メリーを完璧に無視して。

「そうね。舎密せいみにしては洒落せつ気のある玩具だけど、地上を見下せる所しか良い点がないわね」

「何よりも」

「狭すぎる」

完璧な動作で同時に振り返った二人の笑顔は晩秋の風、冬の前触れ。メリーは魂で凍えながら、眼前の幻想が悪意を指輪のようにして見せつけてくる類の存在なのだと知った。

「その老いぼれた眼でも私達が誰かわかったようね」

「そうよ。貴方が思っている通り。ここにいるのは人間以上、人間以外、人間以遠。私は夢月」



「私は幻月。夢幻を描く悪魔ですわ」

彼女達は双子であり、普段は自らが作り出した世界で遊び続けている。夢と幻をふんだんに使って模造された宇宙へ象嵌された偽物の星が光る中を、宙へ浮いた島が点々と存在する世界であり、上も下も無いところは実在の宇宙そのものであったが、どのような角度へ移動してもにも島は常にその一番平たい部分を見せ、さらに島の形にはまるで法則性がなく、中には幼な児が途中で書くのに飽き、破り捨てたかのような跡が残る物すらあった。当然ではある。何しろこの世界を作り出した幻月、夢月姉妹の精神性は子供のそれであったのだ。

今宵彼女達が住処から足を伸ばしたのは、老いた夢が放つ香りに誘われたがため。生乾きの麝香のような芳香

と悪臭の境目にある匂いを探り来てみれば、人間にしては莫大な時間をかけて一心不乱に組まれた、そのくせ少女の面影を残している夢が織りなされていた。

馨かぐわしい珍味に悪魔たちは喜び笑い、目の前に座る人間の脳を読み、その夢を完璧に理解した。退屈な絵本と同じで粗末な出来ではあるが、年月をかけて作り上げただけあってそそられた。あとは彼女達が自分好みに味付けし、飲み干すのみ。夢月は小さく唇を舐めて言った。

「素敵な夢ね。宇佐見蓮子の帰還」

決して漏らすことのなかった秘密を暴かれ驚愕するメリーを二人は嗤う。

「人間が悪魔から隠し通せることなどひとつも無いの。ごちそうさま、マエリベリー・ハーン。そんなになるま

で長く秘められた夢を見ると嬉しくなっちゃう。そうよね、姉さん？」

「もちろんよ、夢月。マエリベリー・ハーン、私からも賛辞を送らせてもらおうわ」

「いらない」

メリーは即答した。彼女が齡と共に得た知恵がそうさせた。宇佐見蓮子を迎えるために積み重ねた経験の中には幻想との対峙も含まれており、そこから得た多くはないう教訓が、目の前の少女たちに関わるかと告げている。

一方で彼女は逃げられなかった。怪奇が目の前で起き、現実と幻想の境界が薄れている今が向こう側へ行つたままの蓮子を迎え入れる好機であり、この渴望に付け入られているのだとも半ば知っていた。

「お利口さんね」

「でも知っていて？　月光を檻の中へ閉じ込めておくのは不可能なのよ」

メリーの覚悟すら筒抜けなのだろう、愉快げに揶揄する幻月と夢月は指と指を絡め、餓えた犬へ見せる乳皿のように合わせた手をそつと差し出した。

「二人はいつも一緒じゃないと。でも貴方は一人ぼっちね」

「だから会わせてあげるわ。宇佐見蓮子に。ううん、連れてきてあげる。我ながら名案ね。そうよね、夢月？　いいでしょう？」

「素敵よ姉さん。マエリベリーもきつと喜んでくれるわ」  
「やめなさい。これは私だけの問題よ」

だが、悪魔の姉妹は結んでいた手を離した。

靴のつま先がかつりと浮遊座敷の床を鳴らし、宇佐見蓮子はそこに立っていた。小さな双子の間を割るようにして出てきた彼女はマエリベリー・ハーンの記憶のままであり、トレードマークだった黒い帽子を片手で押さえ、息を荒らげて肩を上下させている。認識の全てが曖昧となるほどメリーは動揺し、やがて長い夢の結実を味わいかけたが、成功の果実に齒先を沈める事ができないでいた。最後の一步を阻む何かメリーの中にあつたのだ。

蓮子の荒い呼吸と肌に張り付いた髪の毛が、狭い空間の中で少女の熱をメリーへ伝える。人間たちの間で交わされる視線はどこか噛み合わず、蓮子は目の前にいる壮年の女性をどう扱っていいのかわからないといった表情

を浮かべ、辺りを見回し、再び困惑の表情をメリーへ向けた。メリーは予想通りの姿で現れた蓮子を受け入れようとして、為せず、やがて自らも理解できない言葉を口にした。

「貴方、私の知る宇佐見蓮子かしら」

蓮子は意識的なまばたきを一度やり、メリーは唇を素早く閉じた。今やお互いが理解していた。彼女は未知のマエリベリー・ハーンであり、そして彼女はおそらく自分と過ごした宇佐見蓮子ではない事を。幻月と夢月は蓮子を中心として完璧に対称的な姿勢で口を掌で覆っており、そこからは抑えきれない笑い声が漏れている。蓮子は答えた。

「わかりません。でも、私は宇佐見蓮子で間違いないで

す。貴方は」

言葉を詰まらせた少女をメリーは立ち所に理解した。いつも愛称で呼びかけていたから、咄嗟にマエリベリーという本名がなめらかに出てこないのだ。小さな思い出の煌きがメリーの心を温める。彼女達はお互いに全く重なる所が無い訳ではないようだった。

「マエリベリー・ハーン。メリーでいいし、できれば当時のように話してもらえると助かる。随分と老いたから、そっちは戸惑うかもしれないけれど」

絶えず注がれる悪魔の歪んだ笑みを意識せぬよう努めながら、メリーは蓮子を椅子に腰掛けるよう勧め、同時に観察した。幻月、夢月達に蓮子は全く反応を示しておらず、かの双子はどうかやら自分にしか認知できていない

とメリーは判断し、わざわざ見えぬ脅威を示唆することはないだろうと少女らは無視する事に決めた。

「熱い物しかないけど、コーヒー飲む？ 合成の」

「ありがとうございます。いただきます」

何とかして素早く中身を飲むとカップへ小刻みに口づけをしていた蓮子だったが、やがて諦めたのかここへ来る羽目になった顛末を語った。

天岩戸を探すためのサークル活動中にメリーが忽然と消え、それと同時に大きな穴が、月から直接投げかけられたかのように丈長い縦の影が空いた。一瞬だけではあったが友人の手から先が飛び出し、吸い込まれていくのを見た蓮子はためらいも無くそれに飛び込み、そうして不可思議な旅が、蓮子に言わせれば韋駄天の旅路が始ま



った。

穴の中では闇が全てであり、重力すら消え失せ、浮遊感を味わうとすぐさま新しい地面へ吐き出された。穴から道へ、道から穴へ。出口には常に道があり、蓮子はそこを走った。曲がり道の向こうや道へ落ちた陰の中には時折りメリーの後ろ姿が認められたため、後に戻ろうなど考えもしなかった。

黒曜石からなる山腹を刳り貫いて作られた螺旋の回廊を駆け抜け、その次は小国ほどの広さを持つ莊嚴な王宮の中、言葉を交わし合う幾万の王と御佩刀みはかせ持ちの背中で区切られた道を駆け抜けた。生きた獅子の顎から上でびっしりと埋め尽くされた大湿原の木道を、めちやくちやな字を模した宝石が浮かぶ他には踏む場所のない、広大

な雲の上を行つた。

手足は熱を帯び、肺は収縮して痛んだ。時間感覚はのたうつ鼓動の彼方へ追いやられたが、それでも身体は限界の手前で動き続ける事ができた。おそらくは現実ではない世界であり、夢の中をやつてきたのだろうと蓮子は述べた（双子が笑う）。

身体のを廻し、前へ前へと進み、この世界へ足を踏み込んだ。

「以上が私の今まで。次に向かうべき場所への穴が途切れたのも、座つて一息ついているのも、ここが初めてよ」  
頷き返したメリーは視界の隅、蓮子が現れた場所で開いたままになっている結界の裂け目を意識していた。こんな空の上に結界が作られるなど有り得る話ではないし、

話を聞く限りでは結界の裂け目とは違う類の扉を蓮子は抜けてきている。メリーはちらりと幻月と夢月へ視線を滑らせ、あとは黙っていた。蓮子は空になったカップを置いた。

「コーヒー、もう一杯頂戴」

「ええ」

瓶を傾けて嬉しそうに飲み物を注ぎ足すメリーを見つめる蓮子の表情は測りがたい。ただこれだけのやりとりに喜びを感じるようになっていく相棒へ何を思うのか。少なくとも楽しんではない。

「何年ぶりになるの。私がここへ戻ってきたのは」

「四十年ほどかしら」

眉をひそめる蓮子にメリーは苦笑を返した。

「やっぱりおかしい？ おばさんが子供のような話し方をするなんて」

「気にしないで。違うの。私は、その。コーヒーが熱かったから」

「ごめんなさい。もう少し冷ましておくべきだったわ」  
「……うん」

蓮子はコーヒーをちびりと啜った。

「聞かせて、メリー。貴方がこんな空の上で何をしてるのか」

「いいわよ」

メリーは黙って椅子から手を伸ばし、望遠鏡の縁をしばらく指でなぞっていたが、おもむろに口を開いた。

「あの日、秘封倶楽部はニュースを見たの。もしかした

ら、貴方も見たか、あるいは見ることになるのかしら」

その日、衝撃的な、あらゆる人種の耳目を集めることになるニュースが世界中へ拡散された。ダイソン球——恒星を覆う巨大な殻を観測したかもしれぬと研究機関が発表したのだ。

NGC六九六〇と名付けられている星雲方向を観測していたところ、赤外線放射を変則的な周期で増減させる星が見つかった。網状星雲からやって来るノイズだらけのデータの中から、距離にしておよそ四〇光年先にある該当星の物を吟味した所、おそらくそこにはダイソン球が存在する。そういった概要だった。カフェテラスで

捲し立てる蓮子と同じくらい、自分もワクワクしていたのをメリーは覚えていいる。

「ダイソン球。ダイソン・スフィアとも言っただけど、恒星のエネルギーを全部利用するための装置としてダイソンが提唱した仮説、というより空想の類になるかしら。ここを見て。この号外新聞にもあるように、すつぽりと恒星を人工の殻で包んで光も熱も余すことなく頂戴する仕組みなんだけど、廃棄するエネルギーも当然出てくる。それは熱となって排出されるだろうから、赤外線観測によつてこの造物は発見されるだろうってダイソンは考察したの。」

今回はそれにピッタリ当てはまった星が見つかったから、すわ世紀の大発見か、と大騒ぎしてるのね」

「すわなんて言い回し、何処で覚えてきたのよ」

「メリーこそ。通じるなんて思わなかったわ」

「私は現地へ入院してたでしょ。あの山奥に」

昔の科学小説に出てくる天文学的な構造物の発見に世間は湧き立ち、もちろん秘封倶楽部も興奮していたのだ。月面へ思いを馳せた時のように。ラグランジュポイントの空中庭園を目指した時のように。

そしてニユースからすぐに、メリーは夢を見た。

凹凸の少ない野に少女はいた。足元には背の低い、葉を縦に茂らせた黒色の植物がびっしりと繁衍はんえんしており、息苦しく、身体は重かった。重力が強いのだとメリーはすぐに思い至った。遠方へ地球上に存在しない物があったからだ。

それは山脈よりも巨大で長く、首が痛くなるまで見上げて果ての見えない、どこまでも続いている広大な光の帯だった。そこへ近いものほど昼のように明るく照らされており、逆に遠ざかると夜の暗さに染まっていく。ここでは昼夜が回らず、ただ明暗があるだけであり、メリーがいる場所は地球で言えば午後の下り坂、黄昏の外套がその端を見せ始める頃といったところだろうか。風と光の他に動くものが無い世界をメリーは散歩して回り、夢は終わった。

翌日、その話をしたメリーを見る蓮子の瞳の輝きと言ったら。

「今度は私達で二番乗りよ！」

常のごとくメリーの夢へと向かうために秘封倶楽部は



動きだした。出発に使う結界の裂け目は大鳥神社で見出すことやおとりのむらじのおやがみになった。祀られているのは大和武尊やまとたけるのみことと大鳥連祖神。双方ともに異界の開拓者（日本神話におけるそれは、征伐者と同義であつたが）であり、特に前者は白鳥に由来する伝説の持ち主だつた。NGC六九六〇。白鳥座に属する星雲より手前に存在する星、おそらく将来は白鳥座へ組み込まれることになる暗黒星へ向かうのに、これ以上の適格があつただらうか？

予想を違わず彼女達は辿り着けた。夢と同じく息苦しい、横からの光に溢れた世界をはしやいで回つた。蓮子が地面を指差す。

「見てよ。植物が真っ黒なせいで私達の影が無くなつたみたい。たぶん、僅かな光でも吸収できるように進化し

たんでしようね」

「あら、地球のは薄暗いところに生えてるのも緑色してるじゃない」

「緑色なのは、緑の光を弾くようにできてるからなの。それがどうしてなのかは諸説あるんだけど、地球上の植物にとって緑の光は都合が悪いんでしょうね。で、ここに生えてる奴らには都合の悪い光が無いので全部いただいている、と」

「蓮子は生物学にも詳しいのねえ」

「メリーがここの植物の色を教えてくれたからね。予習してきたのよ。それにしても高い光ねえ」

輝く山々を見上げた蓮子はそのまま夜空まで視線を移し、ある数字を、彼女達の生きる時間から数えて、およ

そ四十年前に当たる時刻をつぶやいた。

「何よそれ」

「分からない。なんで解るのかしら」

「ここから地球まで四〇光年だっけ？ J S Tを元に逆

日本標準時

算して時間がわかつちやうんじやないかしら」

「さすがにそれは。でも、実際わかつちやってるし……  
うーん。あ、月もわかるんだ」

「ええ？ どこにあるのよ」

「あつちかな。という事は、今いる面が地球に向いてる  
って事か。なんだか壮大な偶然ね。たまたま向こうに地  
球があるから気付けたなんて。私の目は地球外でも使え  
るんだわ」

「相変わらず気持ち悪い目ね」

「それ久しぶりに聞いたけど、やっぱりメリーの方が気持ち悪いよ」

「はいはい。で、月が見えるってことは現在地もわかるの？」

「それが、なんて言うべきか。アラビアの書翰体ルクアを脳の中に流し込まれてる感覚かしらね」

「じゃあ、今回はアラビア語の対訳辞典を持ってこようか」

「そしたらアトランティス語に変わるんじゃない、多分」  
大方はこのようにして二人は喋り続け、現地文明との接触も期待して歩き回ったが強い重量のためにすぐに疲れてしまい、座つてくつろいだ。

「おかしいわ。人造物どころか動物も未だに見かけない

なんて。まるで初期の地球みたい」

「植物も草ばかりで、木のように進化したものが無い。ねえ、蓮子。ダイソン球って恒星のエネルギーを全部吸うための仕組みなんでしょう？ その表面に全ての光を受け止める植物が覆い茂っているって、なんだか皮肉よね」

「偶然にしては出来すぎだと思う。案外、この植物も科学的に生み出されたのかもね。少しでも光量のロストを削るために造られたのなら腑に落ちるもの。なんでこんなに大繁殖してるのかは謎だけど」

蓮子は黒色植物の葉を一枚ちぎり、切り口に触れないようにしながらしげしげと観察した。

「一度減びてるのかもしれないわ、ここ。完成したのか、

する前に何らかの理由で使用されなくなってから土が地表を覆い、生き残った植物が征服する元ダイソン球。亀裂から吹き上げる恒星の光はもしかしたらそこかしこに広がり、ううん、球体にもなっていない、穴だらけの構造物の上に私達は居るのかもしれない」

「私は自然にできたんじゃないかと思う。そんな気がする。球体じゃないかもしれないっていうのは賛成ね。重力の生んだ奇跡の浮島が軌道を巡り、パンゲア大陸のように寄せては離れを繰り返す天体。変則的で平らかな惑星、天然のダイソン球って素敵よ」

蓮子とメリーは笑いあった。

「どちらにしろ、風景だけ見納めて帰ることになりそうね」

「お弁当でも持つてくるんだったわ」

「帰つてから食べましょ。おにぎりを」

すでに緊張は去り、彼女達は暢気に帰つた後の予定を相談しはじめた。後にして思えば幸せな夢語り。購いを求める手はすぐ側まで差し伸べられていたのだ。今回の夢見の分か、価値を考えればこれまでの冒険全てに付けられた値だったやもしれぬが、メリーからすればどちらにしる大きすぎた。

蓮子は現実へ帰つて来なかつた。夢から醒めた後に彼女はどこへもおらず、メリーは恐怖に溺れながら京都の縁ある場所全てを探し、見つけられず、遂には日本中を探しに行かんとする直前、再びダイソン球の夢へと出かけた。はたして蓮子はいた。

「お腹減らないのよね。夢でよかった」

メリーが実在を確かめるように詰め寄り、掴んだ肩を蓮子はそう言ってすくめた。その時に掌へ感じた震えをメリーは後になって何度思い出しただろうか。

蓮子は夢に囚われ、戻れなくなってしまった。この時に何を話したのか、詳しい内容はメリーの中から失われてしまった。衝撃の中でなんとか知恵を繋ぎあわせて事態を収束しようとした記憶はある。蓮子は必要以上に落ち着いており、後になってメリーは思い至ったが、彼女の狂乱は再会までの時間の中で過ぎ去っていたのだろう。心に残された生傷も、目の前で次々と傷ついていくメリーがいたのであれば隠したはずだ。

「メリー。私と地球を繋ぐ糸が、まだ一つだけあるの」



蓮子はそう言つて天を指さした。暗い天にまばたく星。地球の夜空を見る時と同じ顔で月の光が見えることをメリーへ告げ、思い出させた。その証明のように、当時から四十年前の時刻もまた口にする。

「なんとかするわ。あれに乗って帰るから、貴方は地球で私を観測して」

地より逆巻く光の帯を指さして、蓮子は笑つた。

話を終えると、メリーは話しかけてくる悪魔を無視して眼の前に座る少女へ聞いた。

「コーヒーはまだいる？」

蓮子は断り、メリーが自らのカップへ瓶を傾けているところを見ながら、この別の秘封倶楽部は恐ろしくか細い糸を信じているのだと考えていた。不確定要素が多すぎるこの試みは無謀であり、それは目の前のメリーもよく知っているのだと口ぶりから察しがついている。恐らくは成功しない約束のために消費された年月の大きさを想像しようとして、蓮子は自らが幼すぎる事を発見し、遂には目に映る光景を振り切るべく、しばし瞳を閉じて沈黙した。

さて、幻月と夢月、双子の悪魔はメリーの物語りの間中、ずっと二人の周りをぐるぐる回り続けていた。時には女の脳から読み取った思い出に忠実たらんと、メリーにだけ見える巨大な光の山を夜空いっぱい投影し、当

時の秘封倶楽部そのままに夜空を見上げて感嘆する振りさえしてみせた。明らかに浮遊座敷の向こう側、虚空をも難なく歩き、演じながら少女たちは常に笑っていた。苦杯を呷る者に向けて浮かべる類の笑顔ではあったが。

今や再びメリーの脇に立った悪魔たちは、左右より交互に囁きかけた。

「二人は一緒じゃないとね。一人では半人前だし」

「マエリベリーの願いも私達の願いも同じよ。二人になりたいと思う事。叶えてあげたいじゃない」

「そうすれば私達も笑えるの」

「お互いの笑顔のためにがんばるのは、人間も悪魔も同じ」

「私達二人が笑うために」

悪魔へメリーは目で伝える。『この蓮子は違う』と。幻月と夢月は片足でステップを踏みながら、くるくると指を回した。

「そうね、違うわ」

「でもそれが何？」

やがて踊りながら座敷の縁より足を踏み外し、悪魔たちは笑い声を響かせて地上へと落下していった。

「メリー。私、お邪魔かしら」

瞑想から戻った蓮子が小さな声で聞いた。

「いいえ。考え事をしていたわ。居てもいいの。もう少し休んでいくといいわ」

「それなら、私が見てもわかりそうな古い本とか、情報はない？ ニライカナイのように未来の情報を知るのも

面白そうだけど、いきなりだと多分理解ができないから。有るならそれで時間を、穴が再び現れるまでを一人で待ってみるから。貴方は貴方で、こっちの蓮子のためにできる事をしてあげて」

「それは……いえ、そうね。そうする。少し待ってね」  
メリーはしばらく逡巡して立ち上がると、鞆などの手荷物を集めた場所を探った。自然と例の小箱へ、大和武尊にあやかった品へと視線が行く。メリーは人生における苦渋の象徴から目を逸らすと、紙を大量に挟み込まれて膨れ上がった古いノートを手に取り、蓮子へ渡した。  
「蓮子と別れた星に係する資料を集めたものよ。ノートにしておいてよかった。中身は当時の物ばかりで、後になって公表された情報なんかもあるけれど、理論や発

見事態は古い物だから問題ないはずよ」

見るからに年代物のノートを傷めないように、おそるおそるページを開く蓮子がメリーを見上げると、相手は微笑んだ。

「色はひどいけど、液状金属で補修してあるから普通に扱って大丈夫よ。帰ってきた蓮子が、きつと一番最初に知りたがると思つて保管してたの」

蓮子はページを丹念に読み始め、時折メリーが上から覗き込み、当時の、そして未来になつて公開された情報を繋ぎあわせるべく解説を加えた。

太陽風を利用して放流され、地球からの光日の距離に到達した観測機から異常値が報告されたのは今からおよそ45年前。恒星の存在しない区域にも関わらず、莫大な

光——地球上で太陽から受ける光量の四〇〇〇倍にも及ぶ照射を確認したこの事件は、機器の故障や超新星爆発などが最初に疑われはしたものの、やがてそこに光の流れがあるという事実を突き止められるに至った。指向性が強いために地球からは見えない、巨大な光の柱とも言えるそれは、数年をかけた調査の末におおよその全貌を現す事になる。直径一六五〇万キロメートル、長さ四八五〇光年。もし天の川銀河全体を俯瞰して眺めることが可能であり、なおかつ全ての現象を理解できる神の視点があれば、そこに銀河を貫いて光る極細の糸を見ることができらるだろう。

「私、こんなの知らないわ」

蓮子がつぶやく。

「私の世界でこれが公表されたのは、三〇年前くらいだったかしら。ただ、貴方の世界じゃ発見されないかもしれないし、そもそも存在しないかもしれないわ」

「そんな。ずるいわ、メリー達だけ」

「光が片道を行くだけで、古代メソポタミアから現代までの人類史分の時間がかかる事にちなんだのかしらね。この銀河を貫く光束は、当時のシュメール王の名を取ってギルガメスと名付けられた。例のダイソン球は、その全長調査の途上で観測されたの」

蓮子は目を輝かせてページをめくった。メリーは肩の荷が下りるような安堵を味わっている。長い間用意してきたプレゼントが、意中の通りに大喜びしてもらえ様を目の前にしているのだから。



「それがたとえ別の同一人物でも」

悪魔の声が耳の直ぐ側で聞こえたため、メリーの身体が強張り、掌を握りしめたのは一瞬のこと。彼女はすぐに元の表情へ戻った。蓮子はノートに夢中だ。

「ダークマター、クエーサー。宇宙が好きね、宇佐美蓮子は。どっちも同じように」

「同じなんじゃないかしら。記憶が少し違うだけで。同じような夢を見るもの、この二人。そうよね、姉さん」

「ええ。ああ、マエリベリー、その疑問はごもつとも。『なぜ二人の比較ができるの?』」

完璧に真似られたメリーの声が、本人の耳へと流し込まれる。

「でも私達に時間の流れはあんまり関係ないの。夢なの

だから。貴方も若い頃は夢の中で時間を飛び越えていたんだから。もちろん、人間風の言い回しであるところの次元、平行世界も歩いていけるから、貴方の蓮子も、この蓮子も覗いてきたわ」

「あとね、あの箱の中身も楽しませてもらったの。無断でごめんなさい。でもいいわよね？ あんなスゴい物を、幾千万の夢を吸ってグズグズになった蜜糖菓子を、たかだか虫取りの誘引剤にしようなんてもつたいない」

「今にも染み出しそうなほど中に幻想と夢が詰まってるんだから。今から教える真実と交換しましょう」

幻月と夢月の唇が、耳朵に触れそうなほど寄り添った。

「ねえ、メリー」

「よく考えて」

「ただ一人の少女が、目視すらできぬ地球へどうやって帰るの？」

「貴方はずうっと考え続けてきたけれど」

「一番最初に出した答えで正解よ」

「彼女は失敗した」

「もう戻れない」

声は沈黙した。彼女達は、言葉が人間に染み透る時間をわきまえていた。悪魔であったから。

「だから、目の前の蓮子を助けてあげて。あの子も失敗する」

「彼女を進ませないのは簡単よ。入り口は貴方にしかわからないのだから、指し示さなければいい」

「あとは子供を連れて行くための、小さな小さな嘘をす

こしの間重ねるだけ。ミルフィーユより繊細で、誰も傷つかない嘘。ほら、遠くから帰ってきた子供を助けるための準備をしていたお陰で、目の前の子供を助けることができるわ。貴方がやってきたことは無駄じゃなかったの」

「この宇佐見蓮子だって薄々は知ってるの。自分の旅は失敗するかもしれないって。思い出せない？ この子がやって来た時の瞳に浮かんでいた感情を。覚悟よ、メリー。失う事への覚悟を育みつつあるの。貴方達がそうであつたように。少女の美しい向こう見ずな勇気だろうと、失敗したのなら代償の請求は満遍なく行われる。今の貴方ならよく知ってることでしょう」

「これまでたくさん失つたものね」

「これまでたくさん奪われたものね」

「でも、メリーはこの蓮子を救えるのよ」

「貴方が無くした分を蓮子は健やかに消費していける。

そのための四十年でもあったわよね？　もう家に帰りましょう。目の前の蓮子と一緒に」

メリーは座ったまま、小さく蓮子の名前を読んだ。

眼の前に居る蓮子が顔を上げる。外見のみならず、作る表情も、性格も同じであろう蓮子、記憶を共有していないだけの宇佐見蓮子がメリーを見ていた。夢月と幻月の手がメリーの肩に乗る。呻き声を上げかける程に温かく、柔らかな掌の上から同時に囁かれた。

「さあ、夢の世界を現実に変えるのよ」

この一言が引き金となり、メリーは蓮子へ告げた。

「そこに」

「うん」

「座敷の端辺りに、結界の裂け目がある。行きなさい」  
全てが静止した。星すら黙もたした。

やがて蓮子は礼を言つて立ち上がり、次の世界への扉に向かう。双子の悪魔が翻意を促す言葉をわめく中、メリーはじつと目を閉じたままだった。読みかけの古いノートを荷物が積まれた所へ置いてから、蓮子は示された場所に手を伸ばし、二の腕辺りから先が消えたのを確かめてから振り返つて聞いた。

「ねえ。私は、貴方の蓮子に似てる？」

「いいえ、ちつとも似てないわ」

メリーは期待はずれだと言わんばかりの顔をする。

「そう。じゃあね、メリー」

片手で帽子をしつかりと押さえ、蓮子は結界の向こう側へ飛び込んだ。

「度し難い馬鹿ね」

悪魔はそれでもなお、笑みを浮かべたままだ。蓮子に似た声音を用いているのも苛むためだろう。だが今や、メリーも笑みを浮かべている。

「貴方達には感謝している。忘れていた思い出を掘り出してきてくれるなんて。夢も時には役に立つ」

夢を現に、とメリーは呟いた。悪魔へ、とっておきの衣を見せびらかせる少女のように。

「お嬢様方のおっしやる通り、秘封倶楽部は夢を現に変えるための集まりだった。あの蓮子にとって私は夢なの

だから、現のメリーの元へ向かわせるべきなのは当然の事」

「あなたの夢はどうするの」

「醒める。最後に素敵な白昼夢を貴方たちからもらえたのだし」

メリーの老いた目が悪魔を見据える。

「それだけに感謝する。帰りなさい。蓮子は昔、夢に惑ったままいなくなつた」

「それでいいの？」

「まだ私達にできることはあるのよ？」

「必要ない。私はもう、一人でいい」

双子はそれぞれ首を傾け、共に悪意の凝り固まつた視線をメリーへ注いだ。



「姉さん、こいつ生意気よ」

「よりもよって一人がいいだなんて。愚か者、愚か者の女」

「二人であるならば、二人でなければならぬ。一人でいいなんて事はありえない」

幻月と夢月の顔によぎる禍々しさは筆舌に尽くしがた  
いものだった。さもあろう。メリーは飲み干せなかつた  
盃となるばかりか、あろうことか自分達の在り方すら笑  
い飛ばしてのけたのだ。到底許せることではなく、二人  
は悪魔の習わし通り、もはや味わう気にもなれぬ残り物  
を消し去ることに決めた。

「おまえの蓮子はもういない。だけど別のが残ってるわ  
ね」

「片付けないと。この老いぼれではない方を、あちらのメリーもついでに添えてあげましょう。そうね、今しがた出かけた蓮子の旅は必ず成功させてあげるわ。私達が裏で手伝ってあげる」

「あいつは宇宙が好きだったわね。魂のすべてが肝のように苦くなるほどいじめてから、手の内で握りつぶして宇宙へ向けて撒くの。呪いとともに」

「その様をお前の夢で延々と見せてあげる。死ぬまで、ずっと」

瞬きの後、双子の悪魔は消え去っていた。

メリーは瞼を閉じた。そうして目覚める直前のように大きく深呼吸をすると、床へ引き倒すべく望遠鏡を乱暴に払った。

「こんばんわ」

「こんばんわ」

二人の悪魔が秘封倶楽部の前に現れた。その夜は深く黒く、所々に月の光を浴びた杉や檜が見える鄙びた原野の上に広がっている。

天岩戸から始まった冒険の終わりより、数日が経っていた。老いたメリーを悪意で踏みしだくべく、惨憺たる結末を描き出すため、双子は秘封倶楽部の心身が落ち着くまで待っていたのだ。機を逸するなどということはない。りえなかつた。幻月と夢月にとって、夢の入り口で跳ね回る人間を補足するなど朝飯前なのだから。

蓮子とメリーは落ち着いている。今宵の夢の先触れが現れたのだと思つてゐるのだろうか？ 間違ひではない。獣の顎が喉にかけられる先触れもある。

「いくつか質問を持って来たの。貴方達が答えてくれるのかしら」

蓮子の問いに悪魔達はほくそ笑んだ。おそらくはそういう類の夢を選んで揺蕩つていたのだろう。夢はただ応えるばかりだと信じてゐる愚鈍さを見せつけられ、双子は摘み取る前の花を好きな様に好きに喋らせ、愛でる事に決めた。

「いいわよ」

「何を聞きたいの」

「光の閉じ込め方は知ってる？」

「ブラックホール」

「鏡の迷宮」

間髪入れずに答えられる。

「私が聞きたかった答えは後者。でも、鏡で光を捕まえるには、出口を光と同じ速度で閉じる必要があるの。古典的な方法ならば、不透明な結晶と、照射中はそれを透明に変質させる特殊な光線を使うわね。そこへただの光を通し、透明化させる光線を止めれば結晶の中へ光は留まる。」

それを踏まえて。夢を閉じ込めるにはどうしたらいい？

「すでに閉じ込められているのよ。頭蓋に詰まってるわ」  
「または魂に詰まってるわ」

今度も流れるように問は答えられた。

「私が聞きたい答えじゃないね。メリー、夢を閉じ込める速度ってどうやって出せばいいかな」

蓮子は相棒を見た。メリーは頷く。

「簡単よ。夢と現実の区別をつけない人間がいればいい」  
その答えを少女二人は笑った。音を外す下手な奏者への嗤いさながら。辺りに生える榎や樟の間を、銀の哄笑が流れていった。

「お立ち会い」

蓮子はひとつまみの欠片を悪魔たちに見せつけた。

「貴方達は見たところ外来の幻想のようだけど、草薙剣はご存知？ これはその欠片よ。こんなものを手元に置くなんて、メリーも随分な無茶をやったものね。日本人

の夢を含み続けた剣の欠片には、きつと数多の夢が収められていたことでしょう。

ところで知っているかしら？　日本の神話って、妙に星天に関しての記述が少ないの。星や月の神様がいてだけで、古代シュメールの宇宙論に比べたらお粗末の上ないのよ」

夜空を見上げた夢月の顔が凍りつく。

「姉さん」

蓮子は瞳を閉じた。

「メリー」

幻月も視線を上げた。夜空に燃え上がるのは星と雲、月。どれも光り輝いている。輝いてはいるのだが細部などまるでない光、最も稚拙な筆さばきで塗られた白より

もなお平坦な光が満天にぶら下げられている。夢月の世界であれば、存在を許さぬほどに雑な輝きだった。

メリーはすぐ側にある現実への裂け目を覗きこみ、掌を蓮子の脛に当てた。彼女の瞳に映るのは向こう側にある、現実世界の夜空と月。

「一時三二分一七秒」

野には双子だけが残っていた。

闇の中、例の如く勝手に入り込んだ社の境内を移動しながら、秘封倶楽部は少ない言葉でこれからの事を確認し合った。現実には蓮子にとっては目覚めだったが、メリーにとっては夢の近似値への移動にすぎぬ。夢と現実の区別が付いていないとも言えた。

冒険の後、熱田神宮の結界のほつれを目指そうと言い



出したのは蓮子だった。

別世界のメリーが視線を意識的に逸らしていた箱を拝借してきた蓮子は、その中身が草薙剣の欠片であることを知り、これに幻想を吸収させる方法を模索した。これだけの存在であるならば、神籬ひもろぎ（神社以外、もしくは神社以前において依代や神体になりうる物）どころではない、分社そのものとして通用するほどの格があり、許容量も相応にあると考えたからだ。夢をたっぷり含んだ高野豆腐のようなものだ、彼女はメリーへ説明した。

「もつといいたとえはないの？ 同じ食べ物にするなら、クリームの詰まったワッフルとか」

「それはもう使われたの。あいつら、絶対に私達の所へ来るわ」

「あいつらつて？」

「悪魔よ。あっちのメリーにまとり付いて、言いたい放題。ああもう、まだ頭に来るつたら」

蓮子には幻月と夢月が知覚できていたのだ。突然放り込まれた異界で、最初にあちら側のメリーだけを視界に収めることができたのは僥倖だった。おかげで蓮子は頭の反応が麻痺している間に人間以外の存在を肌で感じ取れたし、メリーに倣って悪魔たちを居ないかのように振る舞うこともできた。彼女達の会話は囁きも多く、蓮子はその全てを聞いたわけではないが悪魔の思惑は外れたようだった。となると、そんな人間に対して悪魔はどのような報復をするだろうか？ その予測は容易だった。古今東西、悪魔の性癖については多くの伝説が語ってい

たのだ。

幻月と夢月が豪語していた、すべての夢へ通じているという言葉を蓮子は信じていない。そんな悪魔が失敗などするはずはない。これも残された物語通りであり、英雄や勇者と同じくやり込める事も可能だろうと信じた。

秘封倶楽部が取った方法は、草薙剣の夢へ侵入するという方法だった。メリーが手にした時、彼女はそこへ一つの小世界を幻視していた。鄙びた光景、日本から失われた神代の原風景。そこから醒めること無く出てゆけば、夢に取り憑く悪魔たちを閉じ込める事ができるかもしれない。なかつたからであり、事実、成功した。

人に見つかる面倒を避けるため、月を遮る木立の中で二人は休息している。蓮子は草薙剣の欠片を取り出し、

つまんで撫でた。メリーはそれをじつと見ている。

「メリー、なんで不機嫌なの」

蓮子が言った。

「それ、あっちの蓮子が戻ってくるために必要なのかもしれないんでしよう。なんで勝手に持ってきたの」

「必要条件じゃないし、たぶん無理だから。あっちにあつても役に立たない」

メリーは目を逸らし、俯いた。

「あっちの私もそう言うはずよ。同じ立場で、こっちの考えがわかるのであれば。ねえメリー、こっちを向いて。」

私たちは今から、のろまなサークルメンバーを迎えに行かないといけないの。私たちにしかできない事で、この高野豆腐じゃないとできない事。

正直に言えば他人事よ。それどころか、あつちのメリーは私の進むべき場所が見えていながら教えなかったんだから、貸しさえあるわね。脅かす悪魔はもう退治されてるし、これ以上は関与せず、私達は私達の秘封倶楽部を楽しむべきなのかもしれない。

でも、何処であろうと宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーンがいるのであれば、せめてこれくらいの距離でお話できるようになるべきじゃない？」

しばらく、どちらも黙っていた。

「出てこないわね、あいつら。神器がちっぽけな封魔に使われるなんて、神様でも予想できなかったでしょうね」

「そろそろ行こうか」

「うん」

メリーは蓮子をじっと見据えた。

「何よ」

「どこの蓮子も無茶ばかり。四十年も付き合った、あつちのメリーは馬鹿ね」

「あら。じゃあ、私を欠片の中へ送り返すの、止める？」  
メリーは鼻を鳴らし、さっさと陰から歩き出た。

「私は馬鹿じゃないけれど、止めないからおいでなさい。  
ちゃんと悪魔と交渉させてあげるわよ」

「まかせといて。あいつら、メリーが出してあげないと何処にもいけないんだから」

腕を振り回して蓮子も歩き出す。

「弱みを握られた悪魔から契約をもぎ取るなんて、使い古された朝飯前よ！」

金属片をメリーの掌の上に、握るようにして渡した蓮子が言った。

「行ってくる。蓮子とメリーが笑うために」

地球から見えて星々の彼方、遠いダイソン球の夢に囚われた宇佐見蓮子は、地表より立ち上る光の山の縁までやって来ていた。メリーと別れてより幾日が費やされたことだろう。昼も夜もない世界の事とて時間感覚などとうに狂っていたが、眠気は地球上と変わらず律儀に訪ねて来たため、蓮子はやむを得ず膝を屈して寝つく事もしばばだった。

すでに視界はほとんど光に塗りつぶされており、現であれば目が潰れていた事に疑いの余地はない。自らが異常である事を初めて強く意識しながら、蓮子は歩いている。地球へ帰るには恒星の光に混ざる以外に道はないと少女は決断していた。地球へ辿り着く可能性のある物はこの光を以って他になく、ゆくべき道はこの目が教えてくれる。宇宙の闇に閉ざされているはずの月光を道標に、地球へ長い旅に出るのだ。

全てが甘い妄想である事は彼女にもわかっていた。だが他にどうしようがあったらどうか。メリーは一人で帰った。四十年に及ぶ約束を課した事は蓮子の肩に重くのしかかっていたし、何より約束を果たして欲しくはなかった。できもしない事でメリーを縛るのか？



待っていてほしかった。受け止めてくれる者がいないのであれば、どこへ向かおうと消え去るしかない。

蓮子は考えるのを止めている。

このまま地の裂け目より恒星へ向かって飛び降り、そこで光となる。この莫大な熱量があれば自らを光と化すこともできるだろう（何故？）。地球へ辿り着いた後は、メリーがなんとかしてくれる（どうやって？）。

蓮子は考えるの止めている。

崖の一步手前まで来ると、蓮子の足は動けなくなった。押し込めていた分別と恐怖とが顔を出し、自らの背骨を這い回りながら告げる。

『夢とはいえ、物理法則に縛られた貴方が恒星に飛び込むことはただの自殺にすぎない。ならば地表で生き続け、

別の手段を作り出すことが最たる生存方法ではないだろうか。光になろうというのは荒唐無稽がすぎるといっても『

彼らはまた、恒星に飛び込んで粉微塵になることなく、そのままであったならばどうなるだろうかとも想像させた。巨大な重力に縛られ、この星が死ぬまで何十億年も核融合の中で生き続けるのだろうか。汗一つ、垢一つ浮かべておらぬ自らの膚を蓮子は見た。夢であるならば死なぬという事もありうる。トリフネの中で合成獣に襲われ、その身は傷ひとつ付かなかったのだ。メリーと違つて。

蓮子は空を見上げた。光に塗り潰された視界でも、月はそこに見えている。幸運にも自転周期と星間の相対速

度が地球から顔を背けていないおかげで、未だに終点は見えていた。

蓮子はメリーを思い出し、自らが口にした言葉をも思い出した。

「なんとかするんだったわ」

蓮子は、崖へ右足を突き入れた。

浮遊感に包まれかけたその刹那、彼女は突然左腕から後方へ引き戻され、地面へ引き倒された。混乱する蓮子の目に写る物は相変わらず光の白だけであり、他の全ては奪われたままだ。逃げるにしろ再度星へ飛び込むにしろ、全力で跳ね起きねばならないと蓮子の爪先が地面を搔いたその時、相手は言葉を発した。

「このまま地球へ向かつては駄目よ」

蓮子は自分の精神が破綻したのだと信じ、全身の力が抜けていくのを感じた。こうもはつきりと自らの声が耳より聞こえるのが、狂気以外の何であらう。

「貴方にも分かっているはず。このままでは万に一つも帰還は叶わない。だから、来たわ」

「誰」

声のする辺りへ向かって、投げやりに蓮子は言った。

「秘封倶楽部」

返ってきたのがもう聞くこともないと思っていた少女の声、メリーの声だったために再び蓮子は衝撃を受けた。その隙を狙うかのように話は続けられる。

「まだ公表されてない、全長四八五〇光年、直径一六〇〇万キロメートルに及ぶ光の束が地球からの光日のとこ

ろにある。それはこの近くにも通つてて、この星は光束の全長を調べる際、副次的に見つかつたものにすぎない」

蓮子と同じ声がゆつくりとした口調で未来の知識を説明をする間、地面に転がつた少女にもじわじわとその現象が想像されていった。

「指向性の強い強烈な定在波のレーザーであるそれと太陽系との相対速度も毎年プラス一四〇キロメートルといつたところで、常に地球の側にあると言つていい。線の両端に莫大な重力場が形成されてる……のは余談ね。今はまだ発見されてないはずだし。貴方はそれに、やがてギルガメスと名付けられる光へ乗ればいいわ」

「地球側からの観測はどうするの。指向性が強いなら、普通の方法じゃ観測できないはずよ」

何も考えられないはずだったが、蓮子の口はひとりで質問を発した。

「そこは私も疑問だったんだけど、なんとかなるみたい。個人的に腹立たしいというか、あいつらに神様のサイコロについて言及されるなんて……ああ、もう！ とにかく大丈夫よ。メリーがいるから」

そうか、と蓮子は腑に落ちた。そうとなれば、自分の為すべきことを違えるような娘ではなかった。

「帰り道がどのあたりにあるか教えて。私、月しか見えないの」

「願いなさい」

今度はメリーの声が答えた。

「願いこそ全てを可能にする」

「非科学的ね。わかった。ありがとう」

蓮子は立ち上がった。あの冥い街で、相棒と駆け巡った時の気持ちがあふれている。返事はなかったが構わずに断崖のあるであろう方向へ向き直り、帽子を落とさないように手でしっかりと押さえ、思い切り飛び出した。

想像通りに落下するより早く、衝撃が全身を揺るがした。恒星が発する膨大なエネルギーにより、視界だけではなく認識の全てが白へと欠落していく中において、蓮子はもはや恐れずに願い、意識を失った。

次に目へ飛び込んできたのは冷たい冷たい鋼の青だったろうか。それらは星雲の色であり、別の場所ではダークハローが真っ黒な口を開け、その中で緑や青や橙色の

星が見えている。後ろへ流れていく宇宙を見て動きのある事を知り、自らを思い出した蓮子は体を眺めた。少なくとも見かけは先ほどまでと同じ服であり、人の形をして存在している。

蓮子はまばゆい光の固まりに、巨大な光の白鳥に跨つて宇宙を推進していた。鳥の身体の縁は霧のようになって黒い宇宙へ散っており、消えていく光の粒が孤独を強く思わせている。だが周りに不可視の凄まじいエネルギーが奔流となつて在る事を蓮子は肌で感じていた。星よりもなお輝く光も、当然それに伴うはずの身を焼く熱も感知できなかつたが、蓮子が夢でなければ確かそこへ流れているのだった。おそらくそれこそが不可視の光束、ギルガメスなのだろう。



進路の小星や隕石<sup>いし</sup>を飲み込みながら、白鳥は翼を羽ばたかせて進んだ。蓮子は千変万化の宇宙を眺めながら、光で作られている骨が軋んで奏でられる音楽をいつまでも飽きることなく聞いていた。

どれほどの時間が経っただろうか。不思議と自らの過去の全てを忘れていた蓮子は、唐突に道の終わりを知った。彼女は首を巡らせ、とある一点を、目的地を発見した。無論ギルガメスは直接地球へは到達していない。蓮子はどうすべきかをしばらく考えたが、初めと同じようにして家路を思い浮かべながら、ただ願った。

鳥が消えた。次いで流れていた星が、暗黒が、空間から全てが消えた。

蓮子は浮遊感に包まれ、そして完全に重力が無くなっ

てしまう前に、ゆつくりと足先が何処かへ着地するのを感じた。すっかりとした強固な地面は、正確には浮遊座敷と呼ばれる物の床であり、望遠鏡がそこへ転ぶのと同時であつたために、多くの音はかき消された。

地球の星空の下で、蓮子は褪せた黄金色の髪を持つ女性と目を合わせた。

京都の南、高度八〇〇メートルの夜空に浮遊座敷が浮かんでいる。最新の結界学と力場維持装置の結晶であるそのの広さは四畳半。完璧な空調の効いた空間内では二人の女性がテーブルに座って談笑しており、古くからの

付き合いなのか、壮年であろう年齢の割に若やいだ身振りが繰り返され、しばしば飲み物や小さな食べ物が口へ運ばれていた。

話すうちに一方が足音に気づいた。遠くから木の葉を踏みしだくに似た音が近づいてきており、やがて空中を歩み来る第三者を発見した。奇妙であったのは、座敷に座る二人の女が空中を歩く人間を見知っているかのように待ち受けており、むしろ怖気づいていたのは来訪者の方であった。

座敷を包む透明金属を通り抜けて入り込んできたのは、帽子、シヨール、スカートの全てを黒で統べている少女であり、先客へ向けて無言で軽く頭を下げた。

幽霊でもなければ為せない仕業を目の前で見せられた

にも関わらず、女たちの反応は落ち着いており、また素早かった。金髪の女性が静かな声で挨拶をすると椅子から立ち上がり、着座と飲み物を勧めた。黒髪の女性も席を離れ、床に積んであった荷物の中から幾つかの菓子を取り出し、並べた。

少女は歓迎に対して居心地が悪そうにしており、二人の様子を眺めながら言った。

「私の名前は宇佐見蓮子です。飲み物は、失礼ですが立ったままで頂きます。すぐに行かなくちゃいけないから」女性達は瞬時に察した。宇佐見蓮子の瞳の色が左右で違っていたからだ。片方は蓮子の物、もう片方はおそろく急ぐ理由となっていているであろう、友人の物。女性達それぞれが見慣れた目だ。見間違うはずもない。

宇佐見蓮子は菓子へ手を付けずにアイステイーを飲み干すと、礼をしてから直ぐに夜空の道へ戻り、歩み去った。歩きぶりから見て、あるいは娘にとつてここは夜空ではなく別の場所であつたのかもしれない。

女達は顔を見合わせた。

「私、あんなだつた？」

「そうでしようよ。今となつては腹立たしいね、若い娘のああいう所は。あの子、私達がおばさんになつた秘封倶楽部だつて気づいてたわ。それなのに頼りもしないで、さつきと行つてしまった」

「急いでいたし、サークル活動中に未来の自分なんて相手にするわけがない」

蓮子は荷物の中からシヨールを取り出し、メリーに渡

した。

「今ですら、きつとそうでしょう。未来の自分なんて相手にしてられない。未来の貴方ならともかく」

「認める」

二人は杖やバックフォルダ、手袋などを取り出しては身に付け、靴まで履き替えた。蓮子がそれぞれの帽子を取り出して型を整える間、メリーはたっぷりとした布をテーブルの上へ広げ、中にあつた小さな欠片をなぞつて言った。

「幻月。夢月」

空席に、双子の悪魔が座つて現れた。

「お菓子は？」

「ミルクティーは？」

頬杖を付く二人の顔は見るからに退屈そうで馴れ馴れしく、四十年ぶりに再会したとはとても思えない態度にメリーはつい微笑んだ。

「その欠片をあげる。いま去っていった宇佐見蓮子の後ろへ連れて行って頂戴。ついでに契約も破棄するから、あの蓮子の手助けをして。裁量は貴方達に任せるから」  
その時に少女たちが浮かべた笑顔は夜そのものであり、冷たい風、葉の散った木であった。

「素敵。夢月、あんたが欠片を持ってなさい」

「姉さんが持ってよ」

「何だって？」

「わかりました」

幻月が指を振ると、浮遊座敷の中に人が通り抜けられ

るほどの結界の裂け目が開いた。

「蓮子」

「はいはい」

蓮子は片手で自分の頭に帽子を乗せ、もう片方の手でメリーにも帽子を被らせる。

夢月が草薙剣の破片を元の布にくるんでポケットへ入れようと四苦八苦する間、幻月は足を振って秘封倶楽部を眺めていたが、やがて双子はいなくなつた。

蓮子とメリーも準備ができるや結界の裂け目に足を踏み入れ、浮遊座敷から跡も残さず消えた。

静かにかかった月の下に、もう誰も取り残されてはいない。

(終)